

370
2
95



0042475-001

a 370-95

日本教育史資料書

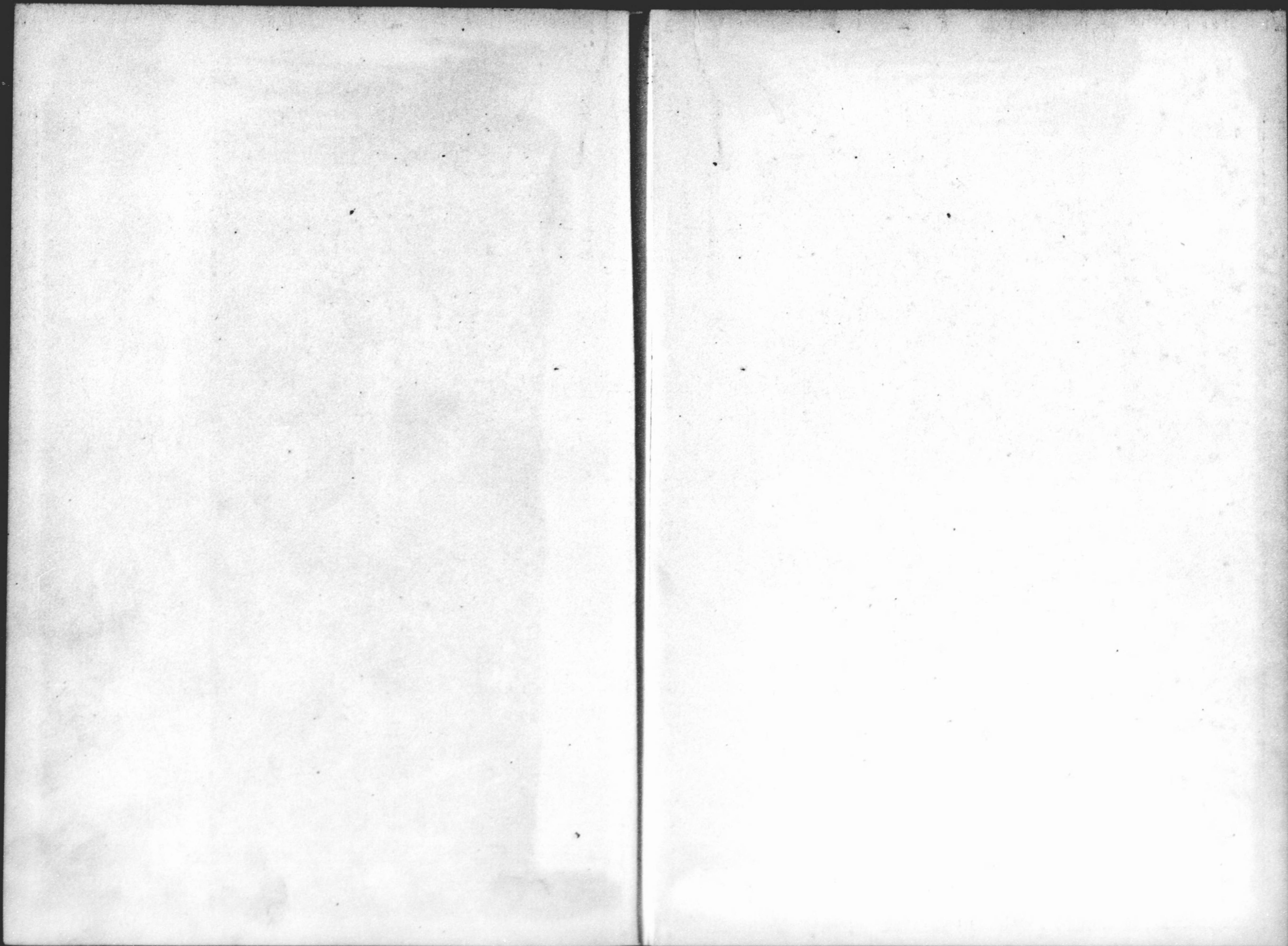
国民精神文化研究所・編

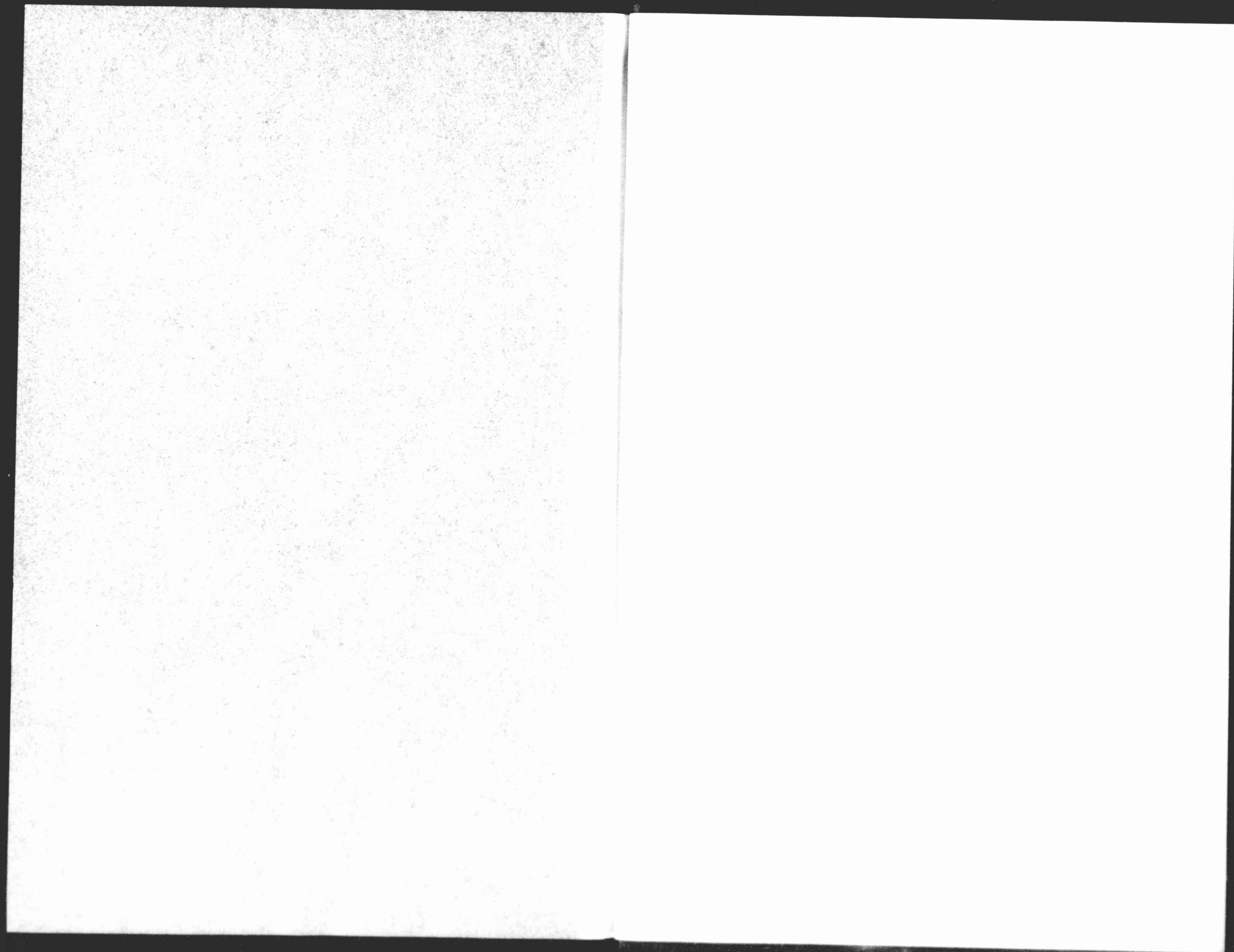
国民精神文化研究所

第1-5輯

1937

AHC





國民精神文化文獻 一二

日本教育史資料書

第一輯

國民精神文化研究所

370
95



教育事實史資料

第一編 上古
第二編 中古

131564

例言

一、本書は日本教育に關する歴史的資料を蒐集、整理せるものであつて、その中本年度に刊行せる第一輯より第五輯までは教育事實史資料とし、次いで公にすべき教育思想史資料と相俟つて、専門學校、師範學校、其他教育史教授の參考書たらしめんとするものである。

一、教育事實史に關する資料の蒐集、整理に際しては、まづ社會形態、思想形態の變遷に應じて、時代的區劃を上古、中古、中世、近世上、近世下、最近世の六部に分ち、各時代の資料を各一編に纏めた。本書は最初に我が國肇國の理想を明かならしむべき資料を掲げ、最後に我が國教學の根本方針を明瞭にすべき資料を以つて結んだのであるが、それ以外には各編ごとその時代の社會形態、思想形態、教化政策に關する資料を「教育の形態」とし、これを最初に置き、それに「教育の理想」、「教育の施設」、「教育の内容」、「教育の方法」といふ項目に従つて各項各一章となし、各編の資料をその順序に配列した。更に各章の内部に於いても、資料は項目に依つて分類し、同一項目内に於いては年代順に配列した。

一、各章の終にある解説は、蒐集せる資料の説明として附したものであるが、同時に成るべくその敘述を通して日本教育事實史の簡単な概観を得しむるやうにした。各資料中難解な語句には簡単な語釋を施し、漢文には句讀訓點を附した。異本に依つて異なる字句は、その中適當と編者の思惟したるものを採用し、原資料に用ゐられてゐる古字、俗字、略字等は、原則として現行文字に改めた。各資料には使用の爲の便を計つて、上古より最近世に至るまで通し番號を附し、解説文にもこれを挿入して、對應に便ならしめた。

一、本年度に刊行せる第一輯より第五輯までの編纂は、研究部長研究囑託吉田熊次監修の下に、所員伏見猛彌、助手渡邊誠、思想調査囑託藤田勳、編輯事務囑託平塚益徳並に編纂囑託東京帝國大學助教海後宗臣之に當つた。

一、第一輯の資料の選擇は、編纂者の外、囑託石津照暉之を擔當した。本輯の解説並びに校正は、主として渡邊誠之に當り、資料の語釋並に校合は、編纂者の外、編輯事務囑託太田兵三郎、同三宅清、同青柳秋生、同田中久夫、同植松茂並に囑託石津照暉、同荻原淺男之を擔當した。

一、第一輯の資料は左記の書を原典とし、他書を参照して校合した。

- 石山寺緣起(續群書類從)
- 出雲風土記(日本古典全集風土記集)
- 今鏡(校註日本文學大系)
- 宇治拾遺物語(新訂増補國史大系)
- 宇津保物語(校註日本文學大系)
- 榮華物語(岩波文庫)
- 延喜式(國史大系)
- 落窪物語(校註日本文學大系)
- 大鏡(岩波文庫)
- 懷風藻(新校群書類從)
- 蜻蛉日記(校註日本文學大系)
- 加茂保憲女集(新校群書類從)
- 玉葉(國書刊行會刊)
- 九條殿遺誠(新校群書類從)
- 顯戒論緣起(傳教大師全集)
- 源氏物語(岩波文庫)
- 源平盛衰記(校註日本文學大系)

例言

三

- 江家次第(増訂故實叢書)
- 江都督願文集(續群書類從)
- 弘法大師行狀記繪圖(東寺藏繪卷)
- 弘法大師御遺告(吉川弘文館刊弘法大師全集)
- 古今和歌集(岩波文庫)
- 古語拾遺(岩波文庫)
- 古今著聞集(新訂増補國史大系)
- 古事記(至文堂刊)
- 古事談(新訂増補國史大系)
- 今昔物語集(新訂増補國史大系)
- 根本大師臨終遺言(傳教大師全集)
- 西宮記(増訂故實叢書)
- 狹衣(校註日本文學大系)
- 讚岐典侍日記(新校群書類從)
- 更級日記(岩波文庫)
- 山家學生式(傳教大師全集)
- 三國佛法傳通緣起(大日本佛教全書)

山密往來(新校群書類從)
 山門堂舍(新校群書類從)
 慈慧大師二十六條式(木版刊本)
 七十一番職人歌合(新校群書類從)
 十訓抄(新訂增補國史大系)
 沙石集(平樂寺書店刊)
 拾芥抄(增訂故實叢書)
 綜藝種智院式并序(吉川弘文館刊弘法大師全集)
 續日本紀(新訂增補國史大系)
 續日本後紀(新訂增補國史大系)
 眞言傳授作法(吉川弘文館刊弘法大師全集)
 新猿樂記(新校群書類從)
 新撰姓氏錄(新校群書類從)
 住吉物語(校註日本文學大系)
 關寺小町(校註日本文學大系)
 續古事談(新校群書類從)
 大安寺緣起(新校群書類從)

台記(史料大觀)
 竹取物語(岩波文庫)
 中右記(史料大成)
 朝野群載(改定史籍集覽)
 堤中納言物語(校註日本文學大系)
 帝王編年記(新訂增補國史大系)
 傳教大師將來目錄(傳教大師全集)
 東大寺要錄(續々群書類從)
 東寶記(續々群書類從)
 土佐日記(岩波文庫)
 とりかへばや物語(校註日本文學大系)
 日本紀略(新訂增補國史大系)
 日本後紀(新訂增補國史大系)
 日本三代實錄(新訂增補國史大系)
 日本書紀(朝日新聞社刊六國史)
 日本文德天皇實錄(新訂增補國史大系)
 濱松中納言物語(校註日本文學大系)

百練抄(新訂增補國史大系)
 扶桑略記(新訂增補國史大系)
 藤原家傳(新校群書類從)
 平家物語(岩波文庫)
 平治物語(岩波文庫)
 方丈記(岩波文庫)
 保元物語(岩波文庫)
 本朝續文粹(國書刊行會刊)
 本朝文粹(國書刊行會刊)
 枕草子(岩波文庫)

萬葉集(樂浪書院刊萬葉集總釋)
 御堂關白記(日本古典全集)
 紫式部日記(岩波文庫)
 律宗綱要(日本大藏經)
 令義解(國史大系)
 令集解(定本令集解釋義)
 類聚國史(新訂增補國史大系)
 類聚三代格(新訂增補國史大系)
 類聚符宣抄(新訂增補國史大系)

昭和十二年三月

國民精神文化研究所

日本教育史資料書 第一輯 目次

第一編 上古

第一章 肇國の理想

資料〔一〕—〔一〇〕……………一
解説……………六

第二章 教育の形態

資料〔一一〕—〔三六〕……………八
解説……………三

第三章 教育の理想

資料〔三七〕—〔四五〕……………三六
解説……………三

第四章 教育の方法

資料〔四六〕—〔六七〕……………三六
解説……………四五

目次

第二編 中古

第一章 教育の形態
 資 料〔六八〕—〔一二二〕…………… 八九
 解 説…………… 八三

第二章 教育の理想
 資 料〔一二二〕—〔一三六〕…………… 六六
 解 説…………… 六次

第三章 教育の施設
 資 料〔一三七〕—〔二九四〕…………… 一〇一
 解 説…………… 三二

第四章 教育の内容
 資 料〔二九五〕—〔四一一〕…………… 三〇
 解 説…………… 六四

第五章 教育の方法
 資 料〔四二二〕—〔五三九〕…………… 三九
 解 説…………… 六〇

第一編 上古

第一章 肇國の理想

〔一〕日本書紀 卷第二

二神乃昇天復命而告之曰葦原中國皆已平竟時天照大神勅曰若然者方當降吾兒矣且將降間皇孫已生號號天津彦々火瓊々杵尊時有奏曰欲以此皇孫代降故天照大神乃賜天津彦々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物又以中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命媛女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

(註) 神代紀下、天孫降臨の條の第一の一書の一節、天照大神の神命を拜した武甕槌神と經津主神とが出雲の神々をして國土を奉還せしめられ、之を大神に復命せられて天孫が降臨せられるのである。○二神 武甕槌神と經津主神

(二) 古事記 上卷

天照大神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝々速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也

(註) 神勅の條

(三) 古事記 上卷

是以隨白之科詔日子番能邇々藝命此豐葦原水穗國者汝將知國言依賜故隨命以可天降

(註) 天孫降臨の條

(四) 日本書紀 卷第二

是時天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡

(註) 神代紀下、天孫降臨の條の第二の一書の一節

(五) 古事記 上卷

於是副賜其遠岐斯八尺勾瓊鏡及草那藝劍亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事爲政

(註) 天孫降臨の條

(六) 日本書紀 卷第二

勅天兒屋命太玉命惟爾二神亦同侍殿內善爲防護

(註) 神代紀下、天孫降臨の條の第二の一書の一節

〔七〕日本書紀
卷第二

勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒、

(註) 神代紀下、天孫降臨の條の第二の一書の一節

〔八〕日本書紀
卷第二

高皇產靈尊因勅曰、吾則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣、汝天兒屋命太玉命宜持天津神籬、降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉、乃使二神陪從天忍穗耳尊以降之、

(註) 神代紀下、天孫降臨の條の第二の一書の一節

〔九〕古語拾遺

于時天祖天照大神、高皇產靈尊、乃相語曰、夫葦原瑞穗國者、吾子孫可王之地、皇孫就而治焉、寶祚之隆、當與天壤無窮矣、即以八咫鏡及草薙劍二種神寶、授賜皇孫、永爲天璽、所謂神璽、寶鏡是也、矛玉自從、即勅曰、吾兒視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿、以爲齋鏡、

〔一〇〕日本書紀
卷第三

下令曰、自我東征於茲六年矣、賴以皇天之威、凶徒就戮、雖邊土未清、餘妖尚梗、而中洲之地、無復風塵、誠宜恢廓皇都、規摹大壯、而今運屬此屯蒙、民心朴素、巢棲穴住、習俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利民、何妨聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎮元元、上則答乾靈授、國之德、下則弘皇孫養、正之心、然後兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎、

(註) 神武天皇即位前紀、己未年三月七日の條

解 説

我が國の教育は時代により必ずしも劃一なる形態をとつたのではなく、又時處位に従つて強調せられた部面も異なるが、それが日本國民の教育を目的とする限り、その根柢に一定不易の原理が存在すべきである。而してその根本原理となつて居るものは即ち肇國の理想である。

天照大神の神勅により、天孫瓊杵尊は三種神器を奉じて「可王之地」たる豊葦原瑞穗國に降臨遊ばされた(一・九)。最初は「古事記」によれば、天照大神の御子が天降ります御豫定であつた(二)が、國家を御統治遊ばす御方として天孫瓊杵尊が御降誕になり(三)、瓊杵尊が降臨遊ばされることとなつた。天照大神は次いで寶鏡の神勅に於いて、寶鏡を御靈代として齋きまつるべきことをのり給ひ(四・五)、天兒屋命と太玉命に對しては祭祀に關することを命じ給ひ(六)、更に齋庭の穗を「當御於吾兒」ことを勅し給うた(七)。又高皇產靈尊は天兒屋命、太玉命に對して天孫の降臨に従ひまつり、祭祀を掌るべきことを重ねて命じてゐられる(八)のである。神武天皇は天祖の神勅の御精神に基いて、大和に於いて天壤と共に窮りなかるべき寶祚に即き給うた(一〇)のである。

以上によつて明かなることく、我が國の肇國の理想は、皇位の神聖、國家の永遠性、君臣間の明分、祭祀を尊ぶ崇祖の精神が高揚せられて居る。我が國の教育の理想も常にこの肇國の理想に向つて追究せられねばならぬのである。

第二章 教育の形態

(一一) 日本書紀 卷第四

使弓部稚彥造弓倭鍛部天津眞浦造眞廣鐵矢部作箭

(註) 綏靖天皇即位前紀、己卯年十一月の條

(一二) 日本書紀 卷第六

天皇厚賞野見宿禰之功亦賜鍛地即任土部職因改本姓謂土部臣是土部連等主天皇喪葬之緣也所謂野見宿禰是土部連等之始祖也

(註) 垂仁天皇紀、三十二年七月六日の條

(一三) 日本書紀 卷第十四

置史戶河上舍人部

(註) 雄略天皇紀、二年十月の條

(一四) 日本書紀 卷第十四

命臣連迎吳使即安置吳人於檜隈野因名吳原以衣縫兄媛奉大三輪神以弟媛爲漢衣縫部也漢織吳織衣縫是飛鳥衣縫部伊勢衣縫之先也

(註) 雄略天皇紀、十四年三月の條

(一五) 日本書紀 卷第廿二

始定黃書畫師山背畫師

(註) 推古天皇紀、十二年九月の條

(一六) 日本書紀 卷第廿二

第二章 教育の形態

百濟人味摩之歸化、曰、學于吳、得伎樂、則安置櫻井而集少年、令習伎樂、俾於是眞野首弟子、新漢齊文二人、習之傳其伎、此今大市首、辟田首等祖也。

(註) 推古天皇紀、二十年五月の條

(二七) 日本書紀 卷第廿

天皇執高麗表疏、授於大臣、召聚諸史、令讀解之、是時諸史於三日內皆不能讀、爰有船史祖王辰爾、能奉讀釋、由是天皇與大臣俱爲讚美、曰、勤乎辰爾、懿哉辰爾、汝若不愛於學、誰能讀解、宜從今始、近待殿中、既而詔東西諸史曰、汝等所習之業、何故不就、汝等雖衆、不及辰爾。

(註) 敏達天皇紀、元年五月十五日の條

(二八) 日本書紀 卷第十三

詔曰、上古之治、人民得所、姓名勿錯、今朕踐祚於茲四年矣、上下相爭、百姓不

安、或誤失己姓、或故認高氏、其不至於治者、蓋由是也、朕雖不賢、豈非正其錯乎、群臣議定奏之、群臣皆言、陛下學失正枉而定氏姓者、臣等冒死、奏可。

(註) 允恭天皇紀、四年九月九日の條、氏姓の錯亂を正す詔勅、これについて同二十八日氏姓の眞偽を決する爲に盟神探湯の神事が行はれた記事がある。「古事記」下卷の允恭天皇の條にも同様の記事が見える。○冒死「通釋」にはこの下に恐らく「奉仕」の二字が脱したのであらうといつてゐる。考み仕奉らむの義

(二九) 古事記 上卷

於是欲相見其妹伊耶那美命、追往黃泉國、爾自殿騰戶出向之時、伊耶那岐命語、詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟、故可還、爾伊耶那美命答曰、悔哉、不速來、吾者爲黃泉戶、嗚然、愛我那勢命、入來坐之事、恐故、欲還、且與黃泉神相論、莫視我、如此白而還入、其殿內之間甚久、難待、故刺左之御美豆、良湯津々間櫛之男柱一箇、取闕而燭、一火入見之時、宇士多加禮斗呂々岐豆、於頭者大雷居、并八雷神成居、於是伊耶那岐命見畏而逃、還。

(註) 黄泉國の條、同趣旨の話が『日本書紀』卷第一に見えてゐる。

二〇 古事記 上卷

是以伊耶那岐大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐穢國而在祁理、故吾者爲御身之禊而到坐竺紫日向之橋小門之阿波岐原而禊祓也。

(註) 禊祓の條、同趣旨の神話は『日本書紀』卷第一にも見えてゐる。○伊那志許米上「上」は上聲たることを示す符。○御身之禊の「禊」を宣長が「ミソギ」と訓んでは身が上と重複するとして「ハラヘ」と訓んだが、なほ「ミソギ」と訓むべきであらう。

二二 延喜式 卷第八

天皇朝廷兩仕奉留、比禮挂伴男、手襪挂伴男、靱負伴男、劔佩伴男、伴男乃八十伴男乎始氏、官官兩仕奉留人等乃過犯家牟雜雜罪乎、今年六月晦之大祓兩祓給比清給事乎、諸聞食止宣略國中兩成出武天之益人等我過犯家牟雜雜

罪事波略○中天津宮事以兵大中臣天津金木乎本打切末打斷兵千座置座兩置足波志兵天津昔曾乎本刈斷末刈切兵八針兩取辟兵天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮如此久乃良波天津神波天磐門乎押披兵天之八重雲乎伊頭乃千別兩千別氏所聞食武國津神波高山之末短山之末兩上坐兵高山之伊穗理短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武如此所聞食兵波皇御孫之命乃朝廷乎始兵天下四方國兩波罪止云布罪波不在止○中遺罪波不在止祓給比清給事乎高山之末短山之末與里、佐久那那太理兩落多支都速川能瀬坐須瀬織津比咩止云神大海原兩持出奈武、如此持出往波荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會兩坐須速開都比咩止云神持可吞兵牟、如此久可吞兵波、氣吹戶坐須氣吹戶主止云神根國底之國兩氣吹放兵牟、如此久氣吹放兵波、根國底之國兩坐速佐須良比咩登云神持佐須良比失兵牟、如此久失兵波、天皇我朝廷兩仕奉留官官人等乎始兵天下四方兩波、自今日始兵罪止云布罪波不在止高天原兩耳振立聞物止馬牽立兵今年六月晦日夕日之降乃大祓兩祓給

比清給事乎諸聞食止宣四國卜部等大川道爾持退出氏祓却止宣

(註)「六月大祓祝詞」の一節

(二二) 萬葉集 卷第三

今代爾之樂有者來生者蟲爾鳥爾毛吾羽成奈武
生者遂毛死物爾有者今生在間者樂乎有名

(註)「太宰帥大伴卿讀酒歌十三首」の中の二首、太宰帥大伴卿とは大納言旅人をいふ。

(二三) 萬葉集 卷第一

八隅知之吾大王高照日之皇子荒妙乃藤原我宇倍爾食國乎
賣之賜牟登都宮者高所知武等神長柄所念奈戸二天地毛縁
而有許曾磐走淡海乃國之衣手能田上山之真木佐苦檜乃孀
手乎物乃布能八十氏河爾玉藻成浮倍流禮其乎取登散和久

御民毛家忘身毛多奈不知鴨自物水爾浮居而吾作日之御門
爾不知國依巨勢道從我國者常世爾成牟圖負留神龜毛新
代登泉乃河爾持越流真木乃都麻手乎百不足五十日太爾作
派須良牟伊蘇波久見者神隨爾有之

(註)「藤原宮之役民作歌」左註に「右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地、八年甲午春正月幸藤原宮、冬十二月庚朔戊乙卯遷居藤原宮」とある。

(二四) 萬葉集 卷第三

皇者神二四座者天雲之雷之上爾盧爲流鴨

(註) 詞書に「天皇御遊雷岳之時柿本朝臣麻呂作歌一首」とある。

(二五) 萬葉集 卷第十九

皇者神爾之座者赤駒之腹婆布田爲乎京師跡奈之都

第二章 教育の形態

(註) 左註に「右一首大將軍贈右大臣大伴卿作」とあり、大伴卿とは家持の祖父安麻呂

〔二六〕萬葉集卷第十九

大王者 神爾之座者 水鳥乃 須太久水奴麻乎 皇都常成都作者不詳

(註) 〔二五〕とつゞいて兩者を一つとして「右件二首天平勝寶四年二月二日聞之即載於茲也」と註してゐる。この註は大伴家持のものと考えられるので、この歌の作者は〔二五〕の作者たる家持の祖父と同一人ではないであらう。随つて現人神の思想は獨り大伴安麻呂の思想ばかりでなかつたことは明瞭である。

〔二七〕萬葉集卷第十八

葦原能 美豆保國乎 安麻久太利 之良志賣之家流 須賣呂伎能 神
乃美許等能 御代可佐禰 天乃日嗣等 之良志久流 伎美能御代御代
之伎麻世流 四方國爾波 山河乎 比呂美安都美等 多豆麻都流 御
調賣波 可蘇倍衣受 都久之毛可禰都 之加禮騰母 吾大王能 毛呂

比登乎 伊射奈比多麻比 善事乎 波自米多麻比豆 久我禰可毛 多
之氣久安良牟登 於母保之豆 之多奈夜麻須爾 鷄鳴 東國能 美知
能久乃 小田在山爾 金有等 麻宇之多麻敵禮 御心乎 安吉良米多
麻比 天地乃 神安比宇豆奈比 皇御祖乃 御靈多須氣豆 遠代爾
可可里之許登乎 朕御世爾 安良波之豆安禮婆 御食國波 左可延牟
物能等 可牟奈我良 於毛保之賣之豆 毛能乃布能 八十伴雄乎 麻
都呂倍乃 牟氣乃麻爾麻爾 老人毛 女童兒毛 之我願 心太良比爾
撫賜 治賜婆 許己乎之母 安夜爾多數刀美 宇禮之家久 伊余與於
母比豆 大伴能 遠都神祖乃 其名乎婆 大來目主登 於比母知豆
都加倍之官 海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大皇乃 敵爾許
曾死米 可弊里見波 勢自等許等太豆 大夫乃 伎欲吉彼名乎 伊爾
之敵欲 伊麻乃乎追通爾 奈我佐敵流 於夜能子等毛曾 大伴等 佐
伯氏者 人祖乃 立流辭立 人子者 祖名不絶 大君爾 麻都呂布物

能等 伊比都雅流 許等能都可佐曾 梓弓 手爾等里母知豆 劍大刀
 許之爾等里波伎 安佐麻毛利 由布能麻毛利爾 大王能 三門乃麻毛
 利 和禮乎於吉豆 且比等波安良自等 伊夜多豆 於毛比之麻左流
 大皇乃 御言能左吉乃 聞者貴美

(註) 題詞に「賀陸奥國出金詔書二歌」と見え、左註に「天平感寶元年五月十二日於越中國守館、大伴宿禰家持作之」とある。

(二八) 萬葉集 卷第三

物部乃 臣之壯士者 大王 任乃隨意 聞跡云物曾

(註) 左註に「右作者未審、但笠朝臣金村之歌中出也」とある。

(二九) 萬葉集 卷第二十

祁布與利波 可敵里見奈久豆 意富伎美乃 之許乃美多豆等 伊渥多

都和例波

(註) 左註に「右一首火長今率部與會布」とある、下野國の防人の歌

(三〇) 日本書紀 卷第三

詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助 朕躬、今諸虜已平、海內無事、可以郊祀天、神用申、大孝者也、乃立靈時於鳥見山中、其地號曰上小野榛原、下小野榛原、用祭皇祖天神焉

(註) 神武天皇紀、紀元四年二月二十三日の條

(三一) 日本書紀 卷第五

百姓流離、或有背叛、其勢難以德治之、是以晨興夕惕、請罪神祇、先是天照大神倭大國魂二神並祭、於天皇大殿之內、然畏其神勢、共住不安、故以天照大神託豐鍬入姬命祭、於倭笠縫邑、仍立磯堅城神籬、

(註) 崇神天皇紀、六年の條

(三一) 日本書紀 卷第六

詔○中五大夫曰我先皇御間城入彥五十瓊殖天皇○崇神惟レ勅レ作レ聖レ欽レ明レ聰達深執謙損志懷沖退綱繆機衡禮祭神祇剋己勤躬日慎一日是以人民富足天下太平也今當朕世祭祀神祇豈得有息乎

(註) 垂仁天皇紀、二十五年二月八日の條

(三三) 日本書紀 卷第五

詔曰惟我皇祖諸天皇等光臨宸極者豈爲一身乎蓋所以司牧人神經綸天下故能世闡立功時流至德今朕奉承大運愛育黎元何當肆違皇祖之跡永保無窮之祚其群卿百僚竭爾忠貞共安天下不亦可乎

(註) 崇神天皇紀、四年十月十三日の條

(三四) 日本書紀 卷第五

詔群卿曰導民之本在於教化也今既禮神祇災害皆耗然遠荒人等猶不受正朔是未習王化耳其選群卿遣于四方令知朕憲

(註) 崇神天皇紀、十年七月二十四日の條

(三五) 日本書紀 卷第七

天皇○景行持斧鉞以授日本武尊曰朕聞其東夷也○中往古來未染王化○中願深謀遠慮探姦伺變示之以威懷之以德不煩兵甲自令臣隸即巧言調暴神振武以攘姦鬼

(註) 景行天皇紀、四十年七月十六日の條

(三六) 日本書紀 卷第七

詔之曰我先皇大足彥天皇○景行聰明神武膺錄受圖治天順人撥賊反正德

俾^シ覆^シ燾^シ道^ヲ協^シ造^シ化^ス、是以^テ普^ク天^ヲ率^シ土^ヲ莫^ク不^シ王^ト臣^ト、稟^シ氣^ヲ懷^シ靈^ヲ、何^レ非^ズ得^ル處^ニ、今^ニ朕^ノ嗣^ヲ踐^シ寶^ヲ祚^ス、夙^ニ夜^ニ兢^シ惕^シ然^シ黎^ヲ元^ヲ、蠢^シ爾^ヲ不^レ悛^シ野^ノ心^ヲ、是^レ國^ノ郡^ヲ無^ク君^ト長^ト、縣^ノ邑^ヲ無^ク首^ト渠^ト者^ヲ焉、自^レ今^ニ以^テ後^ニ、國^ノ郡^ヲ立^シ長^ト、縣^ノ邑^ヲ置^シ首^ト、即^チ取^リ當^ル國^ノ之^ノ幹^ト了^ス者^ヲ、任^シ其^ノ國^ノ郡^ノ之^ノ首^ト長^ト、是^レ爲^ル中^ノ區^ノ之^ノ蕃^ト屏^ト也。

(註) 成務天皇紀、四年二月一日の條

解 說

我が大和民族の社會生活の特色として家族制度の形態が擧げられる。而して上古の家族制度は所謂氏族制度と稱せられ、その祖先を同じくする血族團體たる氏が中心であつた。各氏族は氏人と之に屬する部曲の民とより成り〔七〇〕、氏の上が是等を統率し、氏を代表して一定の専門の職業を以つて朝廷に仕へまつた。各氏の氏人は日常生活に必要な仕事に従事すると共に、この一

定の職業を公の職として代々受繼いたのである。各氏族が定まれる公職を有つて代々朝廷に奉仕したといふことは、當然少くとも次の世代にその所屬する氏の公職に就いて何等かの形に於ける教育が行はれて居たであらうことを想はしめるのである。この事は既に記紀神代の神話に語られる内容から想像することも可能のごとくであり〔二〕、又氏がその職名を附する部によつて呼びなされて居るのも、當時の社會形態を説明するものであらう〔二一〕。時代を歴ると共に新しい部を設けてその氏族をして新なる要求に對へる職を傳へしめたことは、土部〔二二〕・舍人部〔二三〕・衣縫部〔二四〕などの例證に著しい。畫師〔二五〕や樂師〔一六〕等に勝れたものに對し、彼等の氏族をして代々その職を傳へて朝廷に奉仕せしめられたのも、當時の社會形態を物語るものである。

各氏族は、皇室の御經營進捗するに伴ひ、朝廷に奉仕する職業の性質によつて自ら氏族の姓に尊卑の別が生じ、やがて姓は家格の高下を示すべきものとして各氏上に對し朝廷から賜はることとなつた〔二二〕。かくて次第に氏族制度が秩序ある國家的體制に構成せられて行つたのである。所が後になると氏族がその代表する職を必ずしも完全に果し得ないやうな情況も見えて來た〔二七〕。それは職業の性質により必ずしも世襲のみにより得ざることを示したものであり、他方姓の混亂も起り、次第に氏族制度の修正の氣運を醸成したのである。けれども上古に於いては、なほ從來の氏族制度の維持のために大なる努力が續けられた〔一八〕。

我が國固有の思想は現世主義たると全體主義たるとの二點に於いてその特徴が見出される。先づ第一に我が國上古人は自然的欲望を拒斥せず、之を現世に實現するを以つて價値ある生活と考へ、之に對して死後の世界は暗い穢しいものとして忌み恐れられた(一九)。伊弉諾尊が黄泉より歸られて禊祓をせられたのも、此の世に於いて穢を忌まれるが故であつた(二〇)。大祓祝詞の罪穢を拂ふ思想も現世に於けるよき生活を營まんとする希求より出たものと考へられるし(二一)、樂天的人生觀も現世生活を稱へる所から生じたもので、儒佛思想を罵つた大伴旅人の思想(二三)のごときは上古的思想形態を代表するものといつてよい。

理想的人生を現世に於いて實現せんとした我が上古人は、人生の目的を主觀よりも寧ろ客觀に指定した。こゝに客觀とは各人の屬する氏族のためであり、更に各氏族の宗家と考へられる皇室の御爲にであり、その主上たる天皇の御爲にである。それ故に氏族はその祖神を崇め、その氏の上を敬ふと共に、又大和民族全體の祖先たる天照大神を崇敬し、その御子孫たる皇室を崇め奉り(二三・二七)、天皇は「あきつかみ」として神の具現と確信した。現人神の思想は實に我が國固有の思想であつた(二三・二六)。かくて敬神崇祖は忠君の思想と直ちに結びつき、大君の御爲には生命さへ獻げまつつて盡すを以つて人生の最高價値の實現と考へた(二七・二九)。全體主義的社會觀人生觀は我が國固有の思想形態の他の一つの特徴である。

我が國上古人の生活形態は大體以上のごとくであつたが、その長を伸べ短を矯めんとして畏くも歴代の天皇は教化に大御心を惱まし給うた。而してその教化の原理は肇國の理想の御實現にあつたのである。それ故、我が國人の社會生活の歸趨たる祖先崇拜は、天皇御身自ら範を示し給うた。神武天皇が鳥見山に靈時を設けて親しく皇祖天神を祭り給ひ(三〇)、崇神天皇(三一)・垂仁天皇(三二)の敬神の御事蹟も皆この大御心から出で給うたものと拜察される。

かくのごとく皇祖を祭り奉ると共に、皇祖肇國の理想の御實現として歴代の天皇は徳を以つて民を導き給うた(三三)。所謂まつろはぬもののある地方には特に重臣を派して御統治の御精神を傳達せしめ給うた。その大御心は崇神天皇の四道將軍の派遣の御趣旨(三四)や景行天皇の日本武尊に宣給うた御言葉(三五)によつても拜察することが出来るのである。かくて民を導くの本は教化にありとせられた崇神天皇の詔(三四)は歴代天皇の治國の御政策であり、教育に大御心を注がせられることは有難き極みである。崇神天皇から景行天皇の御代までに大體全國が皇化に赴くやうになつたので、成務天皇の朝には内務行政を整備して國都・縣邑を置き、その首長をして直接人民の指導教化に當らしめ給うた(三六)。

第三章 教育の理想

三七 萬葉集卷第二十

比左加多能 安麻能刀比良伎 多可知保乃 多氣爾阿毛理之 須賣呂
 伎能 可未能御代欲利 波自由美乎 多爾藝利母多之 麻可胡也乎
 多波左美蘇倍豆 於保久米能 麻須良多祁乎乎 佐吉爾多豆 由伎登
 利於保世 山河乎 伊波爾左久美豆 布美等保利 久爾麻藝之都都
 知波夜夫流 神乎許等牟氣 麻都呂倍奴 比等乎母夜波之 波吉伎欲
 米 都可倍麻都里豆 安吉豆之萬 夜萬登能久爾乃 可之婆良能 宇
 爾備乃宮爾 美也婆之良 布刀之利多豆 安米能之多 之良志賣之
 祁流 須賣呂伎能 安麻能日繼等 都藝豆久流 伎美能御代御代 加
 久佐波奴 安加吉許己呂乎 須賣良弊爾 伎波米都久之豆 都加倍久

流 於夜能都可佐等 許等太豆 佐豆氣多麻敵流 宇美乃古能 伊
 也都藝都岐爾 美流比等乃 可多里都藝豆 伎久比等能 可我見爾
 世武乎 安多良之伎 吉用伎曾乃名曾 於頰呂加爾 己許呂於母比豆
 牟奈許等母 於夜乃名多都奈 大伴乃 宇治等名爾於敵流 麻須良乎
 能等母
 之奇志麻乃 夜末等能久爾々 安伎良氣伎 名爾於布等毛能乎 己許
 呂都刀米與
 都流藝多知 伊與餘刀具倍之 伊爾之敵由 佐夜氣久於比豆 伎爾之
 曾乃名曾

(註) 題詞に「噓レ族歌一首并短歌」とあり、又左註に「右縁淡海真人三船謠言出雲守大伴古慈悲宿禰解
 任是以家持作此歌也」とある。

三八 古事記中卷

爾神八井耳命讓弟建沼河耳命天皇曰吾者不能殺仇汝命既得殺仇
故吾雖兄不宜爲上是以汝命爲上治天下僕者扶汝命爲忌人而仕奉也

(註) 神武天皇、伊須氣余理比賣の條

〔三九〕萬葉集卷第三

大夫之弓上振起射都流矢乎後將見人者語繼金

(註) 「笠朝臣金村鹽津山作歌二首」の中の一

〔四〇〕萬葉集卷第六

士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而

(註) 左註に「右一首山上憶良臣沈痾之時、藤原朝臣八東使河邊朝臣東人一令問所疾之狀、於是憶良臣報語已畢、有須拭涕悲嘆、口吟此歌」とある。

〔四一〕萬葉集卷第十九

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等於保呂可爾情
盡而念良牟其子奈禮夜母大夫夜無奈之久可在梓弓須惠布
理於許之投矢毛知千尋射知多之劍刀許思爾等理波伎安之比
奇能八峯布美越左之麻久流情不障後代乃可多利都具倍久
名乎多都倍志母
大夫者名乎之立倍之後代爾聞繼人毛可多里都具我爾

(註) 題詞に「慕振勇士之名二歌一首并短歌」とあり、左註に「右二首追和山上憶良臣作歌」とある。作者は大伴家持で、越中國司として在任してゐた天平勝寶二年三月の作である。彼は『萬葉集』の最後の集成者と見られるだけに先輩歌人の作をよんで、作歌上多くの寄與を受けたらしい。この歌も左註によつてうかゞへる様に、山上憶良の歌〔四〇〕をよみ、その心を追慕して和したものである。

〔四二〕古事記上卷

約竟以廻時伊耶那美命先言阿那邇夜志愛上袁登古袁後伊耶那岐命言

阿那邇夜志愛上袁登賣袁各言竟之後告其妹曰女人先言不良於是中
 二柱神議云今吾所生之子不良猶宜白天神之御所即共參上請天神
 神之命爾天神之命以布斗麻邇爾上卜相而詔之因女先言而不良亦還
 降改言故爾降更往迺其天之御柱如先於是伊耶那岐命先言阿那
 邇夜志愛袁登賣袁後妹伊耶那美命言阿那邇夜志愛袁登古袁

(註) 淤能基呂島、國生みの條

〔四三〕 萬葉集 卷第九

鷄鳴 吾妻乃國爾 古昔爾 有家留事登 至今 不絕言來 勝牡鹿乃
 真間乃手兒奈我 麻衣爾 青衿著 直佐麻乎 裳者織服而 髮谷母
 搔者不梳 履乎谷 不著雖行 錦綾之 中丹褰有 齊兒毛 妹爾將及
 哉 望月之 滿有面輪二 如花 咲而立有者 夏蟲乃 入火之如 水
 門入爾 船已具如久 歸香具禮 人乃言時 幾時毛 不生物乎 何爲

跡歟 身乎田名知而 浪音乃 驟湊之 奧津城爾 妹之臥勢流 遠代
 爾 有家類事乎 昨日霜 將見我其登毛 所念可聞

反歌

勝牡鹿之 真間之井見者 立平之 水挹家牟 手兒名之所念

(註) 高橋蟲麿の詠歌、詞書に「詠勝鹿真間娘子一首并短歌」とあり、現在千葉縣市川市に真間といふ土地があるが、この土地に居た手兒奈といふ美少女が多く、男に戀せられて自ら命を絶つたといふ妻争の傳説を詠んだもの

〔四四〕 萬葉集 卷第九

葦屋之 菟名負處女之 八年兒之 片生之時從 小放爾 髮多久麻豆
 爾 並居 家爾毛不所見 虛木綿乃 窄而座在者 見而師香跡 悒憤
 時之 垣廬成 人之詭時 智奴壯士 宇奈比壯士乃 廬八燎 須酒師
 競 相結婚 爲家類時者 燒大刀乃 手穎押禰利 白檀弓 靱取負而

入水 火爾毛將入跡 立向 競時爾 吾妹子之 母爾語久 倭文手纏
 賤吾之故 大夫之 荒爭見者 雖生 應合有哉 完串呂 黃泉爾將待
 跡 隱沼乃 下延置而 打嘆 妹之去者 血沼壯士 其夜夢見 取次
 寸 追去祁禮婆 後有 菟原壯士伊 仰天 叫於良妣 跟地 牙喫建
 怒而 如己男爾 負而者不有跡 懸佩之 小劍取佩 冬菽預都良 尋
 去祁禮婆 親族共 射歸集 永代爾 標將爲跡 退代爾 語將繼常
 處女墓 中爾造置 壯士墓 此方彼方二 造置有 故緣聞而 雖不知
 新喪之如毛 哭泣鶴鳴

反歌

葦屋之 宇奈比處女之 奧柳乎 往來跡見者 哭耳之所泣
 墓上之 木枝靡有 如聞 陳奴壯士爾之 依家良信母

(註) 高橋連龜麻呂の詠歌、題詞に「見菟原處女墓歌一首并短歌」とある。

(四五) 萬葉集 卷十六

昔者有娘子、字曰櫻兒也、于時有二壯士、共誂此娘而捐生、拈競貪死相敵、於是
 娘子歎曰、從古來于今未聞未見一女之身往適二門矣、方今壯士之意有難
 和平、不如妾死相害永息、爾乃尋入林中懸樹經死、其兩壯士不敢哀慟、血泣漣
 襟各陳心緒、

(註) 卷十六の最初の歌の題詞である、平凡な妻争傳説で、この事實の眞偽は疑はしいが、この作が採用さ
 れたと推定される奈良朝中期頃までにいひ傳へられて來た傳説である

解説

上古に於ける教育の理想は大伴家持の「喻族歌」の中に最もよく伺はれると思ふ(三七)。即ち天
 照大神並にその御子孫にまします皇室に對し奉り、赤誠を以つて仕へまつりし大伴家の祖先の名

を辱しめないやうな大丈夫の士とならなければならぬことを説いて居る。この歌の中から、我々は少くとも二つの要素を教育の理想としてとりあげることが出来るであらう。即ちその一つは忠君であり、他は名を重んずることである。忠君は主君に對する關係に於ける價值意識であり、これは我が國固有の思想形態たる祖先崇拜の内容より直ちに導き出されるものである。次に名を重んずるとは自己の本分、即ち主君又は祖先に對する責務を果し得た場合に生ずる面目を重要視することである。随つて忠君と名を重んずることとは必ずしも別個のものではなく、却つて名譽の最高は實に忠君を對象とするものであつた。かゝる教育の理想は上古人に於ける一般のものであつたであらう。上古人は又特に武勇を尙んだ(三九)。武勇の名が後世に傳へられるがごとき男子たることを理想とした(三九)。名を重んずることの内容として武勇は特に重要視せられたやうである。かくのごとく名を重んじた我が國民は、名譽を後世に傳へ得ざることを極力恐れて居たのである(四〇・四一)。

以上は主として男子の教育の理想であつたが、特に女子の教養の理想としては貞淑の徳が稱へられたやうである。諸冉二神が天神柱を廻られた神話は、陽神が陰神に、女は男に従ふべきものたることを諭されたものとして、女子教育の理想を示されたものと見ることが出来る(四二)。女子はかくのごとくつゝまじやかであるべきであると共に、進んで貞操が婦徳として強く要求せら

れて居た。真間の手古奈や蘆屋の菟原處女の傳説が長く永く傳へられ(四三・四四)、櫻兒の話が同情を以つて歌はれて居る(四五)點よりしても、貞淑なることは婦女のあるべき姿であつたであらう。

第四章 教育の方法

〔四六〕古語拾遺

於是素戔嗚尊欲奉辭日神、天照昇天之時、櫛明玉命奉迎獻以瑞八坂瓊之曲玉、素戔嗚神受之轉奉日神、仍共約誓、即感其玉生天祖吾勝尊、是以天照大神育、吾勝尊特甚鍾愛、常懷腋下、稱曰腋子、今俗號稚子、謂和可古、是其轉語也。

〔四七〕日本書紀

既兒生之後、天孫就而問曰、兒名何稱者、當可乎、對曰、宜號彥波瀲武鸕鷁草葺不合尊、言訖乃涉海徑去。

〔註〕神代紀下、海宮遊幸の條の第三の一書の第二の一節

〔四八〕古事記

天皇命詔其後言、凡子名、必母名、何稱、是子之御名。

〔註〕垂仁天皇、沙本比賣の條

〔四九〕日本書紀

留其玉姬女弟玉依姬持養兒、葺不合尊焉。

〔註〕神代紀下、海宮遊幸の條の第一の一書の第三の一節

〔五〇〕古事記

因治養其御子之緣、附其弟玉依毗賣而獻歌之。

〔註〕火遠理命、山幸海幸の條〔四九〕と内容を同じうする神話

〔五一〕日本書紀

第四章 教育の方法

彦火々出見尊取婦人爲乳母湯母及飯嚼湯坐凡諸部備行以奉養焉于時
權用他婦以乳養皇子焉此世取乳母養兒之緣也

(註) 神代紀下、海宮遊幸の條の第三の一書の第二の一節

(五一) 古事記
中卷

命詔何爲日足奉答白取御母定大湯坐若湯坐宜日足奉故隨其后白
以日足奉也

(註) 垂仁天皇、沙本比賣の條

(五三) 日本書紀
卷第一

是時天照大神勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五
男神悉是吾兒乃取而子養焉

(註) 神代紀上、瑞珠盟約の條

(五四) 出雲風土記

高岸鄉郡家東北二里所造天下大神御子阿遲須根高日子命甚晝夜哭坐仍
其處高屋造而坐之即建高椅而登降養奉故云高岸

(註) 「神門郡」の條

(五五) 古語拾遺

蓋聞上古之世未有文字貴賤老少口口相傳前言往行存而不忘

(五六) 古事記
上卷

上古之時言意並朴敷文構句於字即難已因訓述者詞不逮心全以音連者
事趣更長是以今或一句之中交用音訓或一事之內全以訓錄即辭理叵見
以注明意況易解更非注亦於姓日下謂致沙訶於名帶字謂多羅斯如此之
類隨本不改

(註) 『古事記』上表の最後の段の一節

〔五七〕古事記上卷

於是天皇天武詔之朕聞諸家之所實帝紀及本辭既違正實多加虛偽當今之時不改其失未經幾年其旨欲滅斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉故惟撰錄帝紀討敷舊辭削偽定實欲流後葉時有舍人姓稗田名阿禮年是廿八爲入聰明度目誦口拂耳勸心即勅語阿禮令誦習帝皇日繼及先代舊辭

(註) 上表の一節

〔五八〕古事記上卷

太素杳冥因本教而識孕土產嶋之時元始綿邈賴先聖而察生神立人之世

(註) 上表の冒頭の一節

〔五九〕新撰姓氏錄第十四卷

天語連 縣犬養宿禰同祖神魂命七世孫天日鷲命之後也

(註) 「右京神別上」中「天神」の條、「天語」は「姓氏考」には「このころばへを思ふに、天上語と云ふことなかるべし」と解説してゐる。

〔六〇〕出雲風土記

安來郷 ○中 安來郷人語臣等之父也、自爾時以來、至于今日、經六十歲

(註) 「意宇郡」の條

〔六一〕出雲風土記

健部郷郡家正東一十二里二百廿四步先所以號宇夜里者宇夜都辨命其山峰天降坐之即彼神之社至今猶坐此處故云宇夜里而後改所以號健部之纏向檜代宮 御宇天皇天皇勅不忘朕御子倭健命之御名健部定給爾時神

門臣古禰健部定給、即健部臣等、自古至今、猶居此處、故云健部、

(註)「出雲郡」の條

(六一) 日本書紀 卷第一

于時諸神憂之、乃使鏡作部遠祖天糠戶者造鏡、忌部遠祖太玉者造幣、玉作部遠祖豐玉者造玉、又使山雷者採五百箇眞坂樹八十玉、籙野槌者採五百箇野薦八十玉、籙凡此諸物皆來聚集、時中臣遠祖天兒屋命、則以神祝祝之、

(註) 神代紀上、寶鏡開始の條の第二の一書の一節

(六三) 日本書紀 卷第二

時高皇產靈尊勅大物主神、汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心、故今以吾女三穗津姬配汝、爲妻、宜領八十萬神、永爲皇孫奉護、乃使還降之、即以紀伊國忌部遠祖手置帆負神、定爲作笠者、彥狹知神爲作盾者、天目一箇神、

爲作金者、天日鷲神爲作木綿者、櫛明玉神爲作玉者、乃使太玉命以弱肩被太手、繼而代御手、以祭此神者、始起於此矣、且天兒屋命主神事之宗源者也、故俾以太占之卜事、而奉仕焉、

(註) 神代紀下、天孫降臨の條の第二の一書中的一節

(六四) 日本書紀 卷第一

天照大神以天狹田長田爲御田、時素戔嗚尊春則重播種子、且毀其畔、秋則放天斑駒、使伏田中、又見天照大神方織神衣、居齋服殿、則剝天斑駒、穿殿、藁而投納、

(註) 神代紀上、寶鏡開始の條

(六五) 日本書紀 卷第二

兄火酢芹命能得海幸、故號海幸彥、弟彥火々出見尊能得山幸、故號山幸彥、兄

則每有風雨輒失其利、弟則雖逢風雨其幸不忒

(註) 神代紀下、海宮遊幸の條の第三の一書の一節

〔六六〕日本書紀
卷第五

始校人民更科調役此謂男之弭調女之手末調也

(註) 崇神天皇紀、十二年九月十六日の條

〔六七〕日本書紀
卷第三

命諸將練士卒

(註) 神武天皇即位前紀、己未年二月二十日の條

解 說

上古の教育が如何にして行はれたかは之を明確に傳へ得る資料が十分でない。けれどもこの事は、當時全く教育が行はれなかつたことを結論するものではない。幼兒が母親の手に於いて養育せらるべきは上古と雖も變りはなかつたであらう。されば正勝吾勝勝速日尊を腋子と呼ばれた傳説〔四六〕も、御母君たる天照大神が、御子を大切に御養育遊ばされたことを述べたものと思はれる。生まれた子の名を母が命名するといふ風習〔四七・四八〕も、母が子供の養育に重要な關係に置かれて居たことを示すものであらう。かくのごとく幼兒は母の手で養育せられるのが原則であつたが、もしも母がこの任に當り得ない場合は、之に代るべき女性がつけられた。鷓鴣草葺不合尊の御誕生の神話では、御母の妹君が御養育に當られ〔四九・五〇〕、又乳母湯母及び飯嚼湯坐をつけて御養育申し上げたとも傳へ〔五一〕、垂仁天皇の皇子の御養育の際には、御母をとり、大湯坐、若湯坐を定めて日足しまつらせた〔五二〕とあり、何れも乳母のごときものが置かれて居る。是等の記事に見られる「持養」・「治養」・「乳養」又は「日足」といふ字の當てられた「ひたす」なる語は子供の養育を意味するもので、「子養」〔五三〕或は單に「養」〔五一・五四〕の字を當てられた場合も

ある。「出雲風土記」の物語に見られる阿遲須積高日子命は晝夜泣き通されたに拘らず、熱心に養ひ育てられた(五四)。是等によつて上古人が教育に決して無關心でなかつたことを知るべきである。

幼児期が終つて後の教育は如何にして行はれたか。上古の世未だ文字なく人々口々に相傳へたといふ「古語拾遺」の叙述(五五)が學界の常識となつて居る今日、文字による教育は考へられない。それは「古事記」が編纂せられるとき、言葉に文字を當てることに困難をした事實(五六)によつても説明せられると思ふ。果して然らば、上古の教育は恐らく見習ひ聞き覚える所の傳承の方法によつて行はれたであらうことは「古語拾遺」の叙述(五五)によつても略、明瞭である。

先づ言語による傳承の形式は「古事記」を語り傳へた稗田阿禮によつて最もよき例證を見出し得る(五七)。阿禮が傳承した内容は神代から語り繼がれた古事であり、「古事記」の上表の劈頭に見られる「本教」(五八)である。上古には特に重要な事項を傳承するために語部カゴなる専門の職さへあり(五九)、これは獨り朝廷にのみでなく、氏族や地方にもその専門家が居つたであらう(六〇)。彼等は恐らく祭祀やその他の機會を利用して氏族や地方に傳へられた説話を人々に語り、或は祖先に對する崇敬の念を起さしめ、或は土地に對する愛著の情を興さしめたであらう。即ち彼等は上古に於ける教育上重要な機能を果して居たと考へられる。又偉人の名を記憶するために部を

定められたことも、言語による傳承を積極的に教育の方法としてとり上げられた一つの事例である(六一)。かくのごとく上古に於ける祖先の言行は、語り傳へられて子孫の教育上重要な内容となつて居た。祖先の「ことだて」は所謂家訓ともよばれるべき重要な教育手段として傳承せられたのである(二七・三七)。

上古の教育は聞き覚えると共に見習ひの方法によつても行はれたであらうと思はれる。この方法によつて行はれた内容は、何よりも太古から見られる家々の種々の職業があり(六二・六三)、又國民一般の衣食のための農耕・機織(六四)又は漁獵(六五)等がある。是等は長上からの傳承によつて實地に見習ひ聞き覚えたのであらう。崇神天皇が調を定められた時、男子には弭調、女子には手末調を課せられたことは(六六)、男子一般の教養の内容となつて居れものが狩獵であり、女子のそれが機織であつたことを示すものであらう。又武人の家柄は特にその部民の訓練に力を入れたであらう(六七)。總て見習ひによる教育の場合には、何れも實地に際して行はれたものと思はれる。

第二編 中古

第一章 教育の形態

〔六八〕古事記
中卷

百濟國主照古王、以牡馬壹疋、牝馬壹疋、付阿知吉師、以貢上。此阿知吉師者、阿直史等之祖、亦貢上
橫刀及大鏡、又科賜百濟國、若有賢人者、貢上、故受命以貢上人、名和邇吉師、即
論語十卷、千字文一卷、併十一卷、付是人、即貢進。此和邇吉師者、文首等祖、

〔註〕應神天皇、阿知吉師王仁の條

〔六九〕日本書紀
卷第十九

百濟聖明王、更名聖王、遣西部姬氏達、率怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋

若干、經論若干卷、

(註) 欽明天皇紀、十三年十月の條

〔七〇〕日本書紀
卷第廿五

賀正禮畢、即宣改新之詔、其一日罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處々田庄、仍賜食封大夫以上、各有差降、以布帛賜官人、百姓有差、又曰、大夫所使治民也、能盡其治、則民賴之、故重其祿、所以爲民也、

(註) 孝德天皇紀、大化二年一月一日の條

〔七一〕日本書紀
卷第廿五

其二曰、初修京師、置畿內國司郡司、關塞斥候防人、驛馬傳馬、及造鈴契、定山河、凡京每坊置長一人、四坊置令一人、掌按檢戶口、督察奸非、其坊令取坊內

明康強直、堪時務者充里坊長、並取里坊百姓、清正強幹者充、若當里坊無人、聽於比里坊、簡用凡畿內、東自名壑、橫河以來、南自紀伊、兄山以來、西自赤石、櫛淵以來、北自近江、狹々波合坂山以來、爲畿內國、凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、其郡司並取國造、性識清廉、堪時務者爲大領、少領、強幹聰敏、工書筆者爲主政、主帳、凡給驛馬傳馬、皆依鈴傳符、剋數、凡諸國及關、給鈴契、並長官執、無次官執、

(註) 孝德天皇紀、大化二年一月一日の條

〔七二〕日本書紀
卷第廿九

詔公卿大夫及諸臣連并伴造等曰、夫初出身者、先令仕大舍人、然後選簡其才能、以充當職、又婦女者、無問有夫無夫及長幼、欲進仕者、聽矣、其考選准官人之例、

(註) 天武天皇紀下、二年五月一日の條

〔七三〕日本書紀
卷第廿九

詔曰、凡諸歌男、歌女、笛吹者、即傳己子孫、令習歌笛、

〔註〕天武天皇紀下、十四年九月十五日の條

〔七四〕類聚符宣抄
第九

右直幹、故備前守公統朝臣入室弟子也、少年齒胃、大成凝懷、而公統朝臣未發、春桃之舉、忽從秋栢之化、直幹久遊聖水之濱、琢玉不倦、多嘗魯山之嶮、成實切心、見其才能、尤堪採擢、身爲典平、器是函中、謹檢案內、我朝獻策者、始自慶雲之年、至于承平之日、都盧六十五人、元慶以前數十人、多是名其家者也、寬平以後、只有儒後儒孫、相承父祖之業、不依門風、偶攀仙桂者、不過四五人而已、因茲或乍含文藻、忽變登龍之心、或稱非弓裘、遂斷射鵠之望、若見直幹之成名、定多黎獻之企業、加以爲諸國掾、不賜穀倉院料、蒙綸言對策者、滋野良幹、藤原菅根、橘公統、藤原在衡等是也、又散位三統理平、依博士之舉、成大業、望請蒙宣旨、令件

直幹奉方略試、然則不空往年關心之夢、將增後學唾掌之勤、謹請處分、

〔註〕承平五年八月二十五日「請蒙宣旨令奉方略試播磨少掾正六位上橘朝臣直幹狀」の條

〔七五〕本朝文粹
卷第六

是以文時變八座難登之情、仰三品有例之恩、方今筋力盡於五代之朝、年齡及於八旬之暮、若不蒙渙澤、忽填溝壑、則恐天下文士、海內學徒、不知公家用賢捨愚之意、偏見文時之沈淪、相誠皆以爲、勿以風月之情奉君、勿以儒雅之事報國矣、詩書禮樂之道、從此而可永荒、謹案故實、朔旦冬至、有恩詔、篤學者蒙爵賞、高年者預給廩、文時學雖淺、而業傳於家、年雖衰而誠在於公、爰知此嘉瑞之冬至、文時遭逢之秋也、

〔註〕菅原文時「請殊蒙天裁、依勳績及儒勞、敘從三位上狀」の一節

〔七六〕榮華物語
月の宴

第一章 教育の形態

例の宮達は、我里に在し初むる事こそ常の事なれ、これは女御更衣のやうに、やがて内に在しますに、参らせ奉り給ふべき定めあれば、例の女御更衣の参りはさる事なり、これはいと珍らかに様かはり今めかしうて、御元服の夜やがて参り給ふ、帝后の御よめあつかひの程、いとをかしくなん見えさせ給ひける。

(註) 村上御時於禁中、高明女参、嫁爲平親王事の條

〔七七〕玉葉卷第一

人來談云、去二十七日夜、新大納言師長離別室、俄出宅、于今不知在所云々、或云、○中被向若狭守平經盛朝臣之許云々、舊宅、于今被座件所云々、

(註) 仁安二年五月一日の條

〔七八〕日本書紀卷第十九

別表讚流通禮拜功德云、是法於諸法中、最爲殊勝難解難入、周公孔子尙不能知、此法能生無量無邊福德果報、乃至成辨無上菩提、譬如人懷隨意寶、逐所須用盡、依情此妙法寶亦復然、祈願依情無所乏、且夫遠自天竺、爰泊三韓、依教奉持、無不尊敬、由是百濟王臣明謹遣陪臣怒喇斯致契奉、傳帝國流通、畿内果佛所說我法東流、是日、天皇聞已、歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未曾得聞如是微妙之法、○下

(註) 欽明天皇紀、十三年十月の條、「六九」より續く。

〔七九〕續日本紀卷第十

金光明經六十四帙六百四十卷、頒於諸國、々別十卷、先是、諸國所有金光明經、或國八卷、或國四卷、至是寫備頒下、隨經到日、卽令轉讀、爲令國家平安也、

(註) 聖武天皇紀、神龜五年十二月二十八日の條

〔八〇〕續日本紀 卷第十七

略○上加久治賜比惠賜來流 天日嗣乃業止 今皇朕御世爾當且坐者天地乃心遠
 勞彌重彌辱美恐美坐爾聞食々國乃東方陸奥國乃小田郡爾金出在止奏且
 進禮利此遠所念波種種法中爾波佛大御言之國家護我多仁波勝在止聞召
 食國天下乃諸國爾最勝王經乎坐盧舍那佛化奉止爲且天坐神地坐神乎祈
 禱奉挂 畏遠我皇 天皇御世治且拜仕奉利衆人乎伊謝奈比 率且仕奉心
 波禍息且善成危變且全平平等 念且仕奉間爾衆人波不成智登疑朕波金少
 卒止念憂ツキ 在爾三寶乃勝神枳大御言驗乎蒙利天坐神地坐神乃相宇豆
 奈比 奉佐枳波倍 奉利又天皇御靈多知乃惠賜比撫賜夫事依且顯自示給夫
 物在自等念召波 受賜利歡受賜利貴進母不知退母不知夜日畏恐麻利所念
 波天下乎撫惠備賜事理爾坐君乃御代爾當且可在物乎拙久多豆何奈伎朕
 時爾顯自示賜禮波辱美愧美奈母念須是以朕一人夜波貴大瑞乎受賜乎天
 下共頂受賜利歡 流自理可在等神奈我良母念坐且奈母衆乎惠賜比治賜

比御代年號爾字加賜久止 宣天皇大命 衆聞食宣

〔註〕 聖武天皇紀、天平勝寶元年四月一日の條、陸奥國より黄金を出せる時下し給へる宣命 ○御代年號爾字加賜久止 天平の下に勝寶の二字を加へ給ふことを述べられたもので、即ち天平二十一年を改めて天平勝寶元年とせられた。

〔八一〕榮華物語 玉の村菊

大殿○藤原道長いと味氣なき事かなと思し聞かせ給ひて、如何すべきなど思す程に、大將殿○藤原頼通唯消えに消え入らせ給へば、そらの御祈禱、御讀經、御修法、何くれの御祈禱の僧ども集りて加持まわり、萬にの、しれど、あさましくておはしませば、殿の上物も覺えさせ給はず、急ぎ渡らせ給へり、いといとゆゝ、しう見え給へば、唯御顔に顔をあて、涙を流しておはしますに、殿の御前こゝらの年頃仕う奉りつる法華經加護させ給へ、この世界に道弘めさせ給ふ事、多くは某が仕う奉れる事なり、この折だに驗を見奉らずな

り、恩をかぶらでは、何時をか期せんとの給ひ續けさせ給ひて、泣くく、壽量品じゆりやうひんを讀ませ給ふに、大將殿うちみじろぎ給ひて、うち嘲笑はせ給ふ、殿いよく、涙をながして、讀み入りておはします。

(註) 「宇治殿自「幼少」御風病事」の條、宇治殿は藤原道長の男子、當時大納言であつた頼通

(八二)大鏡
下卷

今一人は、馬頭うまのかみにて顯信とておはしき、御童名こけ君なり、寛弘九年壬子正月十九日入道し給ひて、この十餘年は、佛のごとくして行はせ給ふ、思ひかけずあはれなる御事なり、みづからの菩提申すべからず、殿○藤原道長の御爲にも、又法師なる御子の、おはしまさぬがくちをし、事かけさせ給へるやうなるに、されば、やがて、一度に僧正になし奉らむ、となむ仰せられける、とぞ、うけたまはるを、いかゞ侍らむ、うるはしき法服、宮々よりも奉らせ給ふ、殿よりは、麻の御衣もたてまつるなるをば、あるまじき事に申させ給ふなる

をぞ、いみじくわびさせ給ひける、いでさせ給ひけるには、緋の御袍みろのあまたさふらひけるを、顯信「これがあまたかさねて著たるなむうるさき、綿を一つに入れなして、一つばかりをきたらばや、しかせよ」と仰せられければ、乳母「これかれ、そゝき侍らむうるさきに、綿あつくしてまゐらせむ」と申しければ、顯信「久しくもなりなむ、たゞとくと思ふぞ」と仰せられければ、おぼしめすやうこそはと思ひて、あまたを一つに取り入れて、まゐらせたるをぞ奉りて、その夜はいでさせ給ひける、されば御乳母は「かくて仰せられけるものを、何しにしてまゐらせけむと、例ならずあやしと、思はざりけむ心のいたりの無さよ」と、泣き惑ひけむこそ、いとことわりにあはれなれ、ことしも、それにまゐらせ給はむやうに、かくときゝつけ給ひて、やがてたえ入りて、なき人のやうにておはしけるを、人々「かくきかせ給はゞいとほしとおぼして、御心やみだれたまはむと、今さらによしなし、これぞめでたき事、佛にならせ給はゞ、わが御爲も、後の世のよくおはせむこそ、つひの事」と

人々のいひければ、乳母「我は佛にならせ給はむも嬉しからず、わが身の後の助けられ奉らむもおぼえず、たゞ今の悲しさより外の事なし、殿長道もうへ明も、御子どもあまたおはしませば、いとよし、たゞわれ一人が事ぞや」とぞふしまろびまどひける、げにさる事なりや、道心なからむ人は、後の世までもしるべきかはな、

(註) 「太政大臣道長」の條 ○今一人は 道長の子供で、高松殿の上(明子)の腹に男の子が四人ある。頼宗、能信、顯信、長家の順であるが、出家した者は後へまはすのが順なので、三人の名をあげた後に「今一人は」と書いたのである。○寛弘九年「榮華物語」には長和二年とあるが、「小右記」その他によるとその前年になつて居る。又寛弘九年は十二月二十五日を以つて長和と改元したのであるから、寛弘九年とする方がよい。

(八三) 更級日記

昔より由なき物語歌のことをのみ、心にしめで、夜晝思ひて、おこなひをせましかば、いとかなる夢の世をば見ずもやあらまし、初瀬にて前のたび稻

荷より賜ふしるしの杉よとて投げ出でられしを、出でしまゝに稻荷に詣でたらましかば、かゝらずやあらまし、

(八四) 十訓抄 第九

近比、鴨社の氏人に菊大夫長明鴨といふ者有けり、和歌管絃の道人に知られたりけり、社司を望けるが叶はざりければ、世を恨て出家して後、同じく先立て世をそむける人の許へいひやりける、
いづくより人は入けんまくず原秋かぜ吹し道よりぞこし

(註) 第九「可憐無望」事の中「鴨長明出家事」の條

(八五) 日本書紀 卷第十

百濟王遣阿直岐貢良馬二匹、中阿直岐亦能讀經典、即太子菟道稚郎子師焉、於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶、對曰、有王仁者、是秀也、時遣上毛

野君祖荒田別巫別於百濟仍徵王仁也其阿直岐者阿直岐史之始祖也

(註) 應神天皇紀、十五年八月六日の條

〔八六〕日本書紀

是時遣於唐國學生倭漢直福因奈羅譯語惠明高向漢人立理新漢人大國學問僧新漢人日文南淵漢人請安志賀漢人慧隱新漢人廣齊等并八人也

(註) 推古天皇紀、十六年九月十一日の條 ○是時 小野妹子の隋に派遣せられた時

〔八七〕日本書紀

蘇我馬子宿禰請百濟僧等問受戒之法以善信尼等付百濟國使恩率首信等發遣學問

(註) 崇峻天皇紀、元年の條

〔八八〕日本書紀

一日以和爲貴無忤爲宗人皆有黨亦少達者是以或不順君父乍違于隣里然上和下睦諸於論事則事理自通何事不成

二曰篤敬三寶三寶者佛法僧也則四生之終歸萬國之極宗何世何人非貴是法入鮮尤惡能教從之其不歸三寶何以直枉

三曰承詔必謹君則天之臣則地之天覆地載四時順行萬氣得通地欲覆天則致壞耳是以君言臣承上行下靡故承詔必慎不謹自敗

四曰群卿百寮以禮爲本其治民之本要在乎禮上不禮而下非齊下無禮以必有罪是以君臣有禮位次不亂百姓有禮國家自治

五曰絕養棄欲明辨訴訟其百姓之訟一日千事一日尙爾況乎累歲頃治訟者得利爲常見賄聽讞便有財之訟如石投水乏者之訟似水投石是以貧民則不知所由臣道亦於焉闕

六曰懲惡勸善古之良典是以無匿人善見惡必匡其詔詐者則爲覆國

家之利器爲絕人民之鋒劍亦佞媚者對上則好說下過逢下則誹謗上失其如此人皆無忠於君無仁於民是大亂之本也

七日人各有任掌宜不濫其賢哲任官頌音則起奸者有官禍亂則繁世少生知尅念作聖事無大小得人必治時無急緩遇賢自寬因此

國家永久社稷勿危故古聖王爲官以求人爲人不求官

八日群卿百寮早朝晏退公事靡盬終日難盡是以遲朝不逮于急早退必事不盡

九日信是義本每事有信其善惡成敗要在子信群臣共信何事不成群臣無

信萬事悉敗

十日絕忿棄瞋不怒人違人皆有心心各有執彼是則我非我是則彼

非我必非聖彼必非愚共是凡夫耳是非之理誰能可定相共賢愚如鑿无端

是以彼人雖瞋還恐我失我獨雖得從衆同舉

十一日明察功過賞罰必當日者賞不在功罰不在罪執事群卿宜明賞

罰

十二日國司國造勿斂百姓國靡二君民無兩主率土兆民以王爲主所任官

司皆是王臣何敢與公賦斂百姓

十三日諸任官者同知職掌或病或使有闕於事然得知之日和如曾

識其以非與聞勿妨公務

十四日群臣百寮無有二嫉妬我既嫉人亦嫉我嫉妬之患不知其極所以智

勝於己則不悅才優於己則嫉妬是以五百歲之後乃令遇賢千載以難待一

聖其不得賢聖何以治國

十五日背私向公是臣之道矣凡人有私必有恨有憾必非同非同則以私妨

公憾起則違制害法故初章云上下和諧其亦是情歟

十六日使民以時古之良典故冬月有間以可使民從春至秋農桑之節不可使

民其不農何食不桑何服

十七日大事不可獨斷必與衆宜論少事是輕不可必衆唯遠論大事若

疑有失故與衆相辨、辭則得理、

(註) 推古天皇紀、十二年四月三日の條

(八九) 續日本紀 卷第十二

始之於諸國置國史記言事達四方志、

(註) 履中天皇紀、四年八月八日の條

(九〇) 續日本紀 卷第二

遣右大辨從四位下下毛野朝臣古麻呂等三人始講新令親王諸臣百官人等就而習之、

(註) 文武天皇紀、大寶元年四月七日の條 ○親王 この下に恐らく「諸王」の二字を補ふべきであらう

(九一) 續日本紀 卷第二

遣明法博士於六道除西海道講新令、

(註) 文武天皇紀、大寶元年八月八日の條

(九二) 續日本紀 卷第二

詔令内外文武官讀習新令、

(註) 文武天皇紀、大寶二年七月十日の條

(九三) 續日本紀 卷第十四

詔曰朕以薄德忝承重任未弘政化寤寐多慚古之明主皆能先業國泰人樂災除福至修何政化能臻此道頃者年穀不豐疫癘頻至慙懼交集唯勞罪己是以廣爲蒼生遍求景福故前年馳驛增飾天下神宮去歲普令天下造釋迦牟尼佛尊像高一丈六尺者各一鋪并寫大般若經各一部自今春已來至于秋稼風雨順序五穀豐穰此乃徵誠啓願靈貺如答載惶載懼無以自寧案經云若有

國土講宣讀誦恭敬供養流通此經王者我等四王常來擁護一切災障皆使消殄憂愁疾疫亦令除差所願遂心恒生歡喜者宜令天下諸國各敬造七重塔一區并寫金光明最勝王經妙法蓮華經各一部朕又別擬寫金字金光明最勝王經每塔各令置一部所冀聖法之盛與天地而永流擁護之恩被幽明而恒滿其造塔之寺兼爲國華必擇好處實可長久近人則不欲薰臭所及遠人則不欲勞衆歸集國司等各宜務存嚴飾兼盡潔清近感諸天庶幾臨護布告遐邇令知朕意又每國僧寺施封五十戶水田十町尼寺水田十町僧寺必令有廿僧其寺名爲金光明四天王護國之寺尼寺一十尼其寺名爲法華滅罪之寺兩寺相共宜受教戒若有闕者即須補滿其僧尼每月八日必應轉讀最勝王經每至月半誦戒羯磨每月六齋日公私不得漁獵殺生國司等宜恒加檢校

(註) 聖武天皇紀、天平十三年三月二十四日の條 ○天平十九年十一月七日の詔に、朕以去天平十三年二月十四日、至心發願、遍詔天下諸國、各別令造金光明寺、法華寺とあり、又『類聚三代格』も二月十四日にこの詔を掲げてゐる。萩野博士、國分寺建立發願の詔勅に就て、『史學雜誌』三三の六を參照

〔九四〕日本書紀 卷第卅

賜大學博士上村主百濟大稅一千束以勸其學業也

(註) 持統天皇紀、五年四月一日の條

〔九五〕續日本紀 卷第一

施義淵法師稻一万束哀學行也

(註) 文武天皇紀、三年十一月二十九日の條

〔九六〕續日本紀 卷第三

賜正六位下山田史御方布敏鹽穀優學士也

(註) 文武天皇紀、慶雲四年四月二十五日の條

〔九七〕續日本紀 卷第六

第一章 教育の形態

賜從五位下紀朝臣淨人數人穀百斛^{スナナ}優^{スナナ}學士也。

(註) 元明天皇紀、靈龜元年七月十日の條

(九八)續日本紀
卷第七

賜從五位下紀朝臣清人穀一百斛^{スナナ}優^{スナナ}學士也。

(註) 元正天皇紀、養老元年七月二十三日の條

(九九)續日本紀
卷第八

詔曰、文人武士、國家所重、醫卜方術、古今斯崇、宜擢於百僚之內、優遊學業、堪爲師範者、特加賞賜、勸勵後生、因賜明經第一博士從五位上鍛治造大隅、正六位上越智直廣、江各給廿疋、絲廿絢、布卅端、鍬廿口、第二博士正七位上背奈公行文、調忌寸古麻呂、從七位上額田首千足、明法正六位上箭集宿禰虫万呂、從七位下塩屋連吉麻呂、文章從五位上山田史御方、從五位下紀朝臣清人、下毛野

朝臣虫麻呂、正六位下樂浪河內各給十五疋、絲十五絢、布卅端、鍬廿口、竿術正六位上山口忌寸田主、正八位上悉斐連三田次、正八位下私部首石村、陰陽從五位上天津連首、從五位下津守連通、王仲文、角兒麻呂、正六位上余秦勝、志我閉連阿彌陀、醫術從五位上吉宜、從五位下吳肅胡明、從六位下秦朝元、太羊甲許母、解工正六位上惠我宿禰國成、河內忌寸人足、堅部使主石前、正六位下賈受君、正七位下胥形朝臣赤麻呂各給十疋、絲十絢、布廿端、鍬廿口、和琴師正七位下文忌寸廣田、唱歌師正七位下大窪史五百足、正八位下記多眞玉、從六位下螺江臣夜氣女、茨田連刀自女、正七位下置始連志祁志女、各給六疋、絲六絢、布十端、鍬十口、武藝正七位下佐伯宿禰式麻呂、從七位下凡海連興志、板安忌寸犬養、正八位下置始連首麻呂各給十疋、絲十絢、布廿端、鍬廿口、

(註) 元正天皇紀、養老五年一月二十七日の條

(二〇〇)續日本紀
卷第九

第一章 教育の形態

賜諸有學術者廿三人田各有數

(註) 元正天皇紀、養老六年二月二十七日之條

(二〇二) 續日本紀 卷第廿一

饗內外諸司主典已上於朝堂賜主典已上番上及學生等六千六百七十餘人布綿有差其明經文章明法音竿醫針陰陽天文曆勤公勤產工巧打射等五十人賜絲人十絢文人上詩者更益十絢

(註) 淳仁天皇紀、天平寶字二年十一月二十六日之條

(二〇三) 日本書紀 卷第廿九

勅大倭河內攝津山背播磨淡路丹波但馬近江若狹伊勢美濃尾張等國曰選所部百姓之能歌男女及侏儒伎人而貢上

(註) 天武天皇紀下、四年二月九日之條

(二〇三) 類聚國史 卷第七十七

正六位上上村主乙守授外從五位下乙守之男豐田麻呂善蟬歌天皇悅之授外從五位下豐田麻呂讓父

(註) 「音樂部、蟬歌」の條、嵯峨天皇、弘仁十年七月二十八日

(二〇四) 類聚國史 卷第七十七

內宴於仁壽殿是夕勅授正六位上大戶首清上外從五位下清上能吹橫笛故鍾此恩獎

(註) 「音樂部、橫笛」の條、仁明天皇、承和元年一月二十日

(二〇五) 日本書紀 卷第卅

詔左右京職及諸國司築習射所

(註) 持統天皇紀、三年七月十五日之條

二〇六 續日本紀 卷第卅

詔諸國司曰、今冬戶籍可造、宜限九月、糺捉浮浪、其兵士者、每於一國四分而點、其一、令習武事、

(註) 持統天皇紀、三年閏八月十日の條

二〇七 續日本紀 卷第五

詔曰、凡衛士者、非常之設、不虞之備、必須勇健、應堪爲兵、而悉皆羸弱、亦不習武、藝徒有其名、而不能爲益、如臨大事、何堪機要、傳不云乎、不教人戰、是謂棄之、自今以後、專委長官、簡點勇敢便武之人、每年代易焉、

(註) 元明天皇紀、和銅四年九月二日の條

二〇八 續日本紀 卷第廿

勅曰、治國大綱、在文與武、廢武不可、言著前經、向來放勅爲勸文才、隨職閑要、

量置公田、但至備武、未有處分、今故六衛置射騎田、每年季冬、宜試優劣、以給超群、令興武藝、其中衛府卅町、衛門府、左右衛士府、左右兵衛府各十町、

(註) 孝謙天皇紀、天平寶字元年八月二十五日の條

二〇九 續日本紀 卷第卅

朕我東人、爾授刀天侍之、牟留事波、汝乃近護、止之天護、近與止念、天奈毛在、是東人波、常爾云、久額、爾方箭波立止、毛背波、箭方不立止、云天、君乎一心乎、以天護物會、此心知天、汝都可弊止、勅比之御命乎、不忘、此狀悟天、諸東國乃人等、謹之麻利奉侍禮、

(註) 稱徳天皇紀、神護景雲三年十月一日の條

二一〇 日本紀略 前篇十三

令諸國舉武藝秀衆者、

第一章 教育の形態

(註) 桓武天皇紀、延暦十五年三月十九日の條

〔二一〕續日本紀 卷第十五

天皇大命良麻等勅久今日行賜比供奉賜態爾依而御世當且供奉禮留親王等大臣等乃子等乎始而可治賜伎一二人等選給比治給布是以汝等母今日詔大命乃期等君臣祖子乃理遠忘事無久繼坐奉天皇御世爾明淨心乎以而祖名乎戴持而天地與共爾長久遠久仕奉禮等之且冠位上賜比治賜布等勅大命衆聞食宣

(註) 聖武天皇紀、天平十五年五月五日の條

〔二一〕續日本紀 卷第十七

縣犬養橋夫人乃天皇御世重且明淨心以且仕奉利皇朕御世當且毛無忘緩事久助仕奉利加以祖父大臣乃殿門荒穢須事无久守ツ、在自之事伊蘇

之美字牟賀斯美忘不給止自且奈母孫等一一治賜夫又爲大臣且仕奉部留臣多知乃子等男波隨仕奉狀且種種治賜比禮等母女不治賜是以所念波男能未父名負且女波伊婆禮奴物爾阿禮夜立雙仕奉自理在止奈母念須父我加久斯麻爾在止念且於母夫氣教那牟事不過失家門不荒自且天皇朝爾仕奉止自且奈母汝多知乎治賜夫又大伴佐伯宿禰波常母云如久天皇朝守仕奉事願奈伎人等爾阿禮波汝多知乃祖止母乃云來久海行波美豆久屍山行波草牟須屍王乃幣爾去會死米能杼爾波不死止云來流人等止奈母聞召須是以遠天皇御世始且今朕御世爾當且母內兵止心中古止波奈母遺須故是以子波祖乃心成伊自子爾波可在此心不失自且明淨心以且仕奉止自且奈母男女并且一二治賜夫

(註) 聖武天皇紀、天平勝寶元年四月一日の條、陸奥國に黄金出でたる時下し給へる宣命で、從三位中務卿石上乙麻呂之を宣した。○心中古止波奈母「詔詞解」に「むげに聞えず、誤字也、そは念召且奈母などを誤れるにや」とある、即ち「おもほしめてなも」と讀むか

〔二一三〕續日本紀 卷第廿

己家々己門々祖名不失勤仕奉禮止宣 天皇大命乎衆聞食止宣

〔註〕 孝謙天皇紀、天平實字元年七月二日の條

〔二一四〕續日本紀 卷第廿六

天皇何大御命良麻止勅大御命乎衆聞食止勅仕奉人等中爾其仕奉隨狀治
給人毛在又御軍爾仕奉禮留爾依且治給人毛在然此多比賜位冠方常與利
方異仁在可久賜故方平伎時仁奉侍已止方誰人可不奉在侍矣如此久宇治
方夜伎時仁身命乎不惜之天貞久明久淨心乎以天朝廷乎護奉侍流人等乎
己曾治賜比哀賜倍使物爾在止奈毛念故是以今由久前仁毛緩息事无之天
諸能劣家牟人等乎毛教伊佐奈比進常與利毛益須益須勤結理奉侍止之天
奈毛冠位上給治給久止宣 御命乎諸聞食止宣

〔註〕 稱徳天皇紀、天平神護元年一月七日の條

〔二一五〕令義解 卷第三

凡孝子順孫謂高柴泣血三年、順節絕髮五日之類、孝子也、義夫節婦謂羊威五代同壽、郭馬七世共居之類、志
行聞於國郡者申太政官奏聞表其門閭謂假如其門及里門、築堆立榜題云孝子門若里也、同藉悉免課役有精
誠通感謂孟宗泣生多笋、梁妻哭崩城之類、通感也、者別加優賞

〔註〕 賦役令第十七條

〔二一六〕續日本紀 卷第廿

勅曰略中古者治民安國必以孝理百行之本莫先於茲宜令天下家藏孝經一本
精勤誦習倍加教授百姓間有孝行通人鄉閭欽仰者宜令所由長官具以名薦
其有不孝不恭不友不順者宜配陸奧國桃生出羽國小勝以清風俗亦捍邊防
別有高臥潁川遁跡箕山者宜爲朕代之巢許以禮巡問放令養性

〔註〕 孝謙天皇紀、天平實字元年四月四日の條

〔二一七〕續日本紀 卷第廿八

孝子順孫義夫孝婦節婦力田者賜二級表旌其門至于終身田租免給

〔註〕稱徳天皇紀、神護景雲元年八月十六日の條

〔二一八〕續日本紀 卷第卅一

高年窮乏孝義人等養給治賜久止勅 天皇命乎衆聞食宣

〔註〕光仁天皇紀、寶龜二年一月二十三日の條

〔二一九〕續日本紀 卷第卅二

武藏國入間郡人矢田部黑麻呂事父母至孝生盡色養死極哀毀齋食十六月終始不闕免其戶徭以旌孝行又壹岐嶋壹岐郡人直玉主賣年十五夫亡自誓遂不改嫁者卅餘年供承夫墓一如平生賜爵二級并免田租以終其身

〔註〕光仁天皇紀、寶龜三年十二月六日の條

〔二二〇〕續日本紀 卷第卅六

高年窮乏孝義人等治賜養賜夫又天下今年田租免賜久止宣 天皇勅衆聞食宣

〔註〕桓武天皇紀、天應元年四月十五日の條

〔二二一〕續日本後紀 卷第二

安藝國言賀茂郡人風早富鷹德行懿美孝養自厚父母歿後口絶五味哀慕之情無慙忘時勅敘三階免戶田租

〔註〕仁明天皇紀、天長十年十月九日の條

解 説

我が國固有の教育の形態は外國の文化の傳來によつて著しい影響を受けることとなつた。その第一は支那文化の傳來である。「古事記」には應神天皇の朝に百濟から「論語」と「千字文」とが傳へられたことを記して居る〔六八〕が、少くともこの頃までには朝鮮を通して支那文化が紹介せられたことが考へられ、我が國に文字の輸入せられたことは教育史上に重大なる展開を見ることとなつた。第二は佛教の傳來で〔六九〕、これが從來の我が國の思想に變改を齎らす因子となつたことは覆はれないが、一面に於いて、これがため在來の思想内容が豊富となり、人間の個性に對する自覺の深められたことも注意すべきである。

大陸文化、就中隋唐兩朝時代に整備した中央集權的文化は、前編に述べたごとく次第に弊害顯著となつて氏族制度を修正する氣運を速めることとなつた。これが政治上表面に現はれたのは大化改新であつて、從來氏族の享有して居た土地人民の私有を禁じ〔七〇〕、全般的に行政改革を斷行せられると共に、清廉強直才能の勝れたものを選んで行政の任に當らしめること〔七一〕となつた。即ち賢人登庸を要請すべき政治組織を樹立せられたのである。併しながらこの事は必ずしも在來

の氏族制度を根柢より變革せんとする意圖に出でられたのではなく、随つてその後も社會結合の紐帶として氏族制度的機構は部分的に存続した。次編に述べる武士勃興の地盤は、實にこの氏族制度的節度に求めらるべきものである。天武天皇が人材登庸の詔を下された〔七二〕一方に、特殊の藝能の世襲を詔せられたこと〔七三〕、大化改新に大功を樹てた藤原氏が次第に政治的・經濟的に他氏を壓し、事實上立身出世は才學によつて決定し得なくなり、氏による家業が生じたこと〔七四・七五〕等、何れも新しき形態に於いての氏族制度の復活せしことを物語る事例であらう。

家庭生活は夫婦別居が一般形式であるが、平安朝時代から次第に同じ屋敷に住む風習も生じて來た。けれども嫁入の形式は皇室以外には先づなく〔七六〕、婿入が普通であつて、この形式は平安朝末期まで續いた〔七七〕。これは中世と著しい相異で〔五五三・五五四〕、家庭に於ける訓育上重要な影響を有するものとして注意せらるべきである。

上古に見られる現世主義的思想形態はこの時代にも變る所はなかつた。欽明天皇の朝に佛教が受容せられたのは來世の生活のためではなく、この世に於ける「無量無邊の福德果報」ありと考へられたからである〔七八〕。随つてその後佛教に對する信仰は、現世に於ける果報を第一義的對象とした。聖武天皇が國家平安を目的として諸國に經文を頒ち、之を轉讀せしめられ〔七九〕、鎮護國家の爲に大佛を建立せられた〔八〇〕がごとき、その著しい例である。平安朝時代に入つても加治

祈禱に佛教が盛に利用せられたのも、佛教の現世的功德を信じたからである〔八一〕。中古の思想形態に於いて前代と異なる點は、個人の幸福出世を希求することにあつた。この傾向は時代と共に著しく、人間以上の力に對する歸依もその爲の手段であつた。顯信の入道よりも現世の立身を希望した乳母の話〔八二〕、稻荷を信じたならばかゝる不幸は見なかつたであらうと喚いた菅原孝標の女〔八三〕などその若干の例であり、現世の希望が遂げられない時、始めて慰安を佛教に求めることが平安末期から著しく見られるやうになつて來た〔八四〕。

支那及び印度の文化の傳來は、我が國文化史上の新たな展開を齎すこととなつたが、畏くも朝廷は是等の新事態に對し積極的に國民の指導に當り給うた。先づ第一に、一度渡來した外國文化に對し、積極的に攝取・同化のために努力せられた。應神天皇は阿直岐に御下問の結果王仁を召し給ひ〔八五〕、推古天皇は支那へ留學生を派遣せられた〔八六〕。臣下も之にならつて、例へば蘇我氏が善信尼を百濟に留學せしめ〔八七〕、その他、進んで外國文化の攝取に努めたものは少くなかつた。かゝる情勢にあつて國家觀念を深め、よく海外文化の攝取と理解とに努力せられ、國民の指導者として文化的偉業を建てられたのは聖德太子であつた。太子の攝政の時代に定められた十七條憲法はこの新しき時代に處する國民の覺悟を教へられると共に、我が文化の將來への方向を示されたものである〔八八〕。是より先、履中天皇は地方に國史を置いて傳承事項を登録せしめられ

〔八九〕、その後文武天皇の朝に律令の制定せられるや、律の講習を全國に行はしめ〔九〇―九二〕、聖武天皇の朝には國分寺及び國分尼寺を置いて佛教の普及に努力せられた〔九三〕がごとき、單なる消極的な文化受容の態度ではなく、積極的に之を使用せられたことを物語るものである。

新しき文化を攝取して之を消化すべき當時の要求に對し、朝廷は何よりも學問の獎勵を強調せられたのは蓋し當然のことであつた。嵯峨天皇の勅に「經國治家莫善於文、立身揚名莫尚於學」と見える〔九五〕が、歴代の天皇は學士の優遇に努められ〔九四―一〇二〕、知育の必要を認識せられたのである。技藝の方面にも獎勵の思召があり、技人・藝能者を優遇せられた例が少なくない〔一〇二―一〇四〕。之に對して武術も、平安奠都前後までは絶えず獎勵せられた〔一〇五―一〇六〕が、その後は殆ど學問の獎勵にのみ重點が置かれて居たやうである。徳育に對しても深き關心が示された。忠君・崇祖等の美德の宣揚に大御心をそゝがせられたことは、歴代天皇の宣命に明瞭に拜察することが出来るし〔一一一―一一四・一一七・一一八・一二〇〕、令には孝子・順孫・義夫・節婦等志行高きものには課税を免じて優賞を加へ〔一二五〕、孝謙天皇が家ごとに「孝經」を藏すべきことを勅せられ〔一二六〕、徳行ある人民を優遇・褒賞せられた〔一二七―一二二〕ことによつても窺ふことが出来るのである。

第二章 教育の理想

〔二二二〕古事談 第二

此時病僧被昇起執念誦オシモミテ曰ウレシク令來給タリ、八万餘部轉讀法華最第一之文オマヘニタテマツル、俗ヲ令生給バ關白攝政ヲ令生給ヘ、女ヲ令生給バ女御后ヲ生給ヘ、僧ヲ令生給バ法務大僧正ヲ生給フベシト祈畢、即以命終云々、

(註)「臣節」の章「清水寺師僧戀慕進命婦事」の條

〔二二三〕九條殿遺談

凡成長頗知物情之時、朝讀書傳、次學手跡、其後許諸遊戲、但鷹犬博奕重所禁遏矣、元服之後未趁官途之前、其所爲亦如此、

〔二二四〕九條殿遺談

〔二二四〕九條殿遺談
凡爲君必盡忠貞之心、爲親必竭孝敬之誠、恭兄如父、愛弟如子、公私大小之事、必以一心同志、纖芥勿隔、

〔二二五〕九條殿遺談

凡爲人常致恭敬之誠、勿生慢逸之心、交衆之間用其意也、

〔二二六〕大鏡 上卷

ひと、せ、入道殿藤原道長の、大井に逍遙させ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と、わかたせたまひて、その道にたへたる人々を、のせさせ給ひしに、この大納言殿のまゐり給へるを、入道殿道長かの大納言いづれの舟にかのるべきとのたまへれば、公任、和歌の船にのり侍らむとのたまひて、よみ給へるぞかし、

をぐら山あらしの風のさむければもみぢのにしききぬ人ぞなき
 申しうけ給へるかひありて、あそばしたりな、御みづからものたまふなる、
 公任「作文の船にぞのるべかりける、さてかばかりの詩をつくりたらまし
 かば、名のあがらむことも、まさりなまし、くちをしかりけるわざかな、さて
 も殿のいづれにとおもふ、とのたまはせしになむ、われながらこゝろおご
 りせられし」とのたまふなる、ひと事のすぐるゝだにあるに、かくいづれの
 道にも、ぬけいで給ひけむは、古も侍らぬ事なり、

(註) 「太政大臣頼忠」の條にある頼忠の子大納言公任の逸話。「古今著聞集」卷第五、「十訓抄」第十などに
 も載せられてる有名な話であるが、「拾遺和歌集」卷第三秋部にはこの歌の詞書として「嵐山のもとをまか
 りけるに紅葉のいたく散り侍りければ」としかない。「拾遺抄」も同様であつて、この逸話は後世の作り話か
 も知れない。

二二七 古今著聞集 卷第五

圓融院大井川逍遙の時三船にのる者ありけり、帥民部卿經信卿又この人

におとらざりけり、白河院西河に行幸の時、詩歌管絃の三の船をうかべて、
 其道の人々をわかちてのせられけるに、經信卿遅參の間ことの外に御
 けしきあしかりけるに、とばかりまたれて参りけるが、三事かねたる人に
 て、みぎはにひざまづきて、やゝいづれの船にてもよせ候へといはれたり
 ける、時にとりていみじかりけり、かくいはんれうに遅參せられけるとぞ、
 さて管絃の舟にのりて詩歌を獻せられたりけり、三船に乗とはこれ也、

(註) 「和歌第六」の章「源經信卿大井河逍遙乘三船事」の條、承保三年十月二十五日の行幸の時であらうと察
 せられる。殆ど同文が「十訓抄」第十にも載せられてる。

二二八 古今著聞集 卷第五

能因はいたれるすきものにてありければ、
 都をば霞とともにたちしかど秋風ぞふく白川の關
 とよめるを、都にありながら此歌をいださん事念なしと思ひて、人にもし

られず久しくこもり居て、色をくろく日にあたりなしてのち、陸奥國のかたへ修行の次によりたりとぞ披露し侍りける。

(註) 「和歌第六」の章「能因法師白河關歌事」の條、この逸話は殆ど同文のままで「十訓抄」第十に收められて居る。「拾遺和歌集」卷第九羈旅部にこの歌を入れて「みちのくににまかり下りけるに白川の關にてよみ侍りける」と詞書がついてゐる。

(二二九) 平家物語
卷第七

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、我身共に七騎取て返し、五條の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸をとぢて開かず、忠度と名乗給へば、落人歸り來たりとて、其内噪ぎあへり、薩摩守馬より下り、自高らかに宣ひけるは、別の子細候はず、三位殿に申べき事有て、忠度が歸り參て候、門を開れず共、此際迄立寄せ給へ」と宣へば、俊成卿さる事あるらん、其人ならば苦かるまじ、入れ申せ」とて、門をあけて對面有り事

の體何となうあはれなり、薩摩守宣ひけるは、年來申承はて後、愚ならぬ御事に思ひ參らせ候へ共、この二三年は京都の噪國々の亂併當家の身の上の事に候間疎略を存ぜずといへども、常に參り寄る事も候はず、君既に都を出させ給ひぬ、一門の運命はや盡候ぬ、撰集の有るべき由承りしかば、生涯の面目に、一首なり共御恩を蒙らうと存じて候しに、やがて世の亂出で來て、其沙汰なく候條、唯一身の歎きと存る候、世靜まり候なば勅撰の御沙汰候はんずらん、是に候ふ卷物の中に、さりぬべきもの候はゞ、一首なりとも御恩を蒙て、草の蔭にても嬉しと存候はば、遠き御守りところ成參せ候んずれ」とて、日來詠置れたる歌共の中に、秀歌と覺きを百餘首書集られたる卷物を、今はとて打立れける時、是を取て持れたりしが、鎧の引合せより取出で、俊成卿に奉る、三位是をあけて見て、かゝる忘れ形見を給り置候ぬる上は、努々疎略を存ずまじう候、御疑あるべからず、さても只今の御渡りこそ情も勝れて深う、哀れも殊に思ひしられて感涙抑へ難う候へ」と宣

へば、薩摩。守悦で、今は西海の浪の底に沈まば沈め、山野に屍をさらさばさらせ、浮世に思置く事候はず、さらば暇申て、とて、馬に打乗り、甲の緒をしめ、西を指いてぞ歩せ給ふ、

(註) 「忠度都落」の條

(二三〇) 更級日記

辛うじて思ひよることは、いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに、山里に隠しすゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめとばかり思ひ續けあらましごとにも覺えけり、

(註) 本文は「三七三」から續く

(二三一) 古今著聞集 卷第五

待賢門院の女房に加賀といふ歌よみありけり、

かねてより思ひしことよふし柴のこるばかりなるなげきせんとは
といふ歌を年比よみて持たるを、おなじくはさるべき人にいひちぎりて
忘られたらんによみたらば、集などに入たらんおもても優なるべしと思
ひて、いかゞしたりけん花園のおとゞ仁有に申そめてけり、おもひのごとく
にやありけん此歌を参らせたりければ、おとゞいみじく哀におぼしにけ
り、さてかひがひしく千載集に入にけり、世の人ふししばの加賀とぞいひ
ける、能因がふる舞に似たりけるにや、

(註) 「和歌第六」の章「待賢門院女房加賀詠伏柴秀歌事」の條、この逸話は殆ど同文のまゝで「十訓抄」第十に收められて居る。「千載和歌集」卷第十三戀歌三には「花園左大臣につかはしける」なる詞書をそへて選入せられてゐる。○集 勅選和歌集をさす。○能因がふるまひ「二二八」を見よ

〔一三二〕山家學生式

國寶何物、寶道心也、有道心人、名爲國寶、故古人言、徑寸十枚、非是國寶、照于一隅、此則國寶、古哲又云、能言不能行、國之師也、能行不能言、國之用也、能行能言、國之寶也、三品之内、唯不能言不能行、爲國之賊、乃有道心佛子、西稱菩薩、東號君子、惡事向己、好事與他、忘己利他、慈悲之極、釋教之中、出家二類、一小乘類、二大乘類、道心佛子、卽斯此類、今我東州、但有小像、未有大類、大道未弘、大人難興、誠願先帝○桓武天皇御願、天台年分、永爲大類、爲菩薩僧、然則枳王夢猴、九位列落、覺母五駕、後三增數、斯心斯願、不忘汲海、利今利後、歷劫無窮、

〔註〕「天台法華宗年分學生式一首」の所謂六條式の序の全文

〔一三三〕東大寺要錄卷第八

學者寶發神乎、照振情性、開其理致、節其邪心、除人甚乎丹青、飭身逾乎脂粉、人之立身、不可無學、但檢束人情所難、放蕩物心所易、及其未有念慮、使稟受嚴師

之嚴道、尊功業可建、仍檢治部省天平十年十月廿三日牒稱、奉勅諸國々師自今以後、具注教訓成業弟子并教導父某經某論若干卷數、附朝集使申送所司者必須國師、從今以後宜加勸勵各令得所、其成器者具舉身才、每年至終申送綱所、僧綱得之追入京内、誠其盛否、若誠無滯隨能授位、

〔註〕天平勝寶四年五月九日「應勸僧尼等學問事」の條

〔一三四〕類聚三代格卷第二

長賢昔植善因、幸生聖代、忝備濫吹、誤預二會、爲報國家恩德、勸導寺中學徒、方今勤學立業者、寔繁有徒、而此寺經被輪轉、僅待其運、遠次久、人皆含歎、因茲進者尤少、退者方多、長賢每見如此、莫不愁吟、望請此兩會立義者、每年貢進、則使佛日更增光明、寶算彌加長久者、中納言從三位兼行左近衛中將藤原朝臣基經宣奉勅依請、

〔註〕貞觀十年五月十五日の大政官符「應令法隆寺僧每年預維摩最勝兩會立義事」の一節 〇二會後

三條天皇の延久四年から圓宗寺に於いて始めて五日間法華會を行はせられ、爾後毎年十二月に之を修す。その後、白河天皇の承暦二年法勝寺に於いて大乘會を修せられ、之を一會と稱するの勅があり、今より二會の講師を経て當に僧綱に任ずべしとせられた。その後、永保二年圓宗寺にて更に最勝會を行ひ、之を天台の三會と稱した。

〔二三五〕新猿樂記

五郎者、天台宗學生、大名僧也、因明内明通達、内教外典兼學、俱舍唯識懸舌端、止觀立義收臆中、三十講提婆品、内論議第一番、宏才博覽、而論議決擇之吻、破滿座惑、當辨利口、而說經教化之聲、驚衆會睡、大意釋名不朦、入文判釋分明、梵音錫杖之句如花、題名諷誦之詞似蝶、表白神分、神情六種回向、法事袈裟係肩、田々裳腰斜、念珠挈、指纖々、袍頸鮮、捧如意香爐、姿蕩々、履鼻廣草鞋、勢魏々、謂其容貌、忝等阿難羅睺、論其智辨者、同身子富樓那、一音二辨、三形四德、五愛敬、既以具足、仍南北二京揚名、公私請用不遑、但歷堂行堂衆、所期者、天台座

主耳、

〔二三六〕弘法大師御遺告

爰外戚舅阿刀大足大夫等曰、從爲佛弟子、不如出大學、令習文書、立身任此教、言受俗典、少書等及史傳、兼學文章、然後及于生年十五、入京、初逢石淵贈僧正、大師受大虛空藏等、并能滿虛空藏法、呂入心念持、後經遊大學、從直講味酒淨、成讀毛詩、左傳、尚書、問左氏春秋於岡田博士、博覽經史、專好佛經、恒思我之所、習上古俗教、眼前都無利弼乎、一期之後、此風已止、不如仰真福田、因作三教指、歸三卷、成近士號、稱無空、

(註)「應勸護東寺真言宗家後世内外事管合貳拾伍條狀」の中「初示成立由縁起第一」の條 ○三卷淨土三卷等あつて、眞言では「大日經」・「金剛頂經」・「蘇悉地經」をいふ。

解 説

推古天皇十二年の十七條憲法、大化の改新の詔、之に基いて制定せられた律令等によつて賢人登庸の途が開かれるに至つたので、中古の貴族は孰れも著しく立身出世を希求し(二二二)、そのための學問才能を彼等の教育の目標とした。當時に於ける立身の道は畢竟高位の官吏たるにあつたから、官吏登庸の標準となつて居た學文に優れて居ることが當時の教育の理想となつたのである。前に引用した嵯峨天皇の勅には「經國治家、莫善於文、立身揚名、莫尙於學」と述べさせられ(二五四)、「懷風藻」の序には天智天皇が學校を興された御趣旨を説明して「調風化俗、莫尙於文、潤德光身、孰先於學」と述べて居る(二三九)。九條師輔の遺誠にも物情を知つたならば先づ讀書すべきを説いて、之を官途に就くための須件と考へた(二三三)。是等によつて中古の教育の理想が主として知的教養にあつたと考へてよい。「九條殿遺誠」には忠孝(二二四)や恭敬(二二五)等の徳目を擧げて居るが、一般の教育理想は重點を知育に置かれて居た。

時代が下つて藤原氏、特に北家の權勢が確立し、他家はこれが下風に立つことを甘んずるに至り、政治的に表面平靜に歸すると共に知識才能を獲得することに依つて必ずしも出世することが出来なくなり、教育の理想も次第に情操を主とした詩歌管絃の道が重んぜられるに至つた。かくて所謂「三船の才」を有する文化的教養人が平安貴族一般の理想となつたのである。公任が「ひと事のすぐるゝだにあるに、かくいづれの道にも、ぬけいで給ひけむは、古も侍らぬ事」と賞讃せられ(二二六)、經信が「時にとりていみじかりけり」と稱揚されて居る(二二七)のは、彼等の文化的教養が當時の上流社會の理想であつたことを證するものであると思ふ。實際平安朝貴族がかかる教養に名聲を博せんとして如何に苦心したかは、前記の經信の例にも見られ(二二七)、能因の逸話にも知られ(二二八)、忠度が今世の願として勅選和歌集に自詠の選入を俊成に乞うた有名な物語にも顯著である(二二九)。

次に女子の教養の理想は何に措かれたか。女子が結婚を目的に教育せられたことは必ずしもこの時代のみの特徴ではないが、特にこの時代は結婚による出世を憧憬し(二三二)、又假令不幸なる生活を送るとも「源氏物語」の光君のごとき貴紳との結婚を理想とした(二三〇)。その爲には矢張り男子と同じく或程度の文化的教養を理想とした。「集などに入たらんおもても優なるべし」と考へた加賀の逸話(二三一)はそのよき一つの例であらう。

奈良朝・平安朝を通じて、中古の佛教が朝廷を中心とし、貴族の歸敬を受け、その結果僧侶の勢力が著しく擡頭したことは教育史上注意すべきことである。僧侶教育は、その施設等に於いて

も、大寺や國分寺或は年分度者等をはじめ、皇室を中心とした國家的なものも多く、願はれた功德・利益も亦祭儀的な行事を通じて國家的なものが多かつた。出家得道の理想もこのやうに事實に關聯して現實的であることは當然で、朝廷の御ため、國家のためといひ、特にその組織制度の下に於いて現世の立身出世を希ふといふのが普通のやうである。それ等の中、前の場合の代表的なものは最澄の『學生式』(二三二)にあらはれて居り、後の場合の例としては太政官符を始めその他隨所に見ることが出来る(二三二・二三三・二三四・二三五)。空海の『御遺告』にも眞福田を仰ぐことが説かれてをるが、『御遺告』の他の部分や『三教指歸』等を見てもやはり右のやうな一般の傾向が當時あつたことを察知することが出来る(二三六)。

第三章 教育の施設

(二三七) 日本書紀 卷第廿五

以沙門旻法師、高向史、立理爲國博士、

(註) 孝徳天皇即位前紀、六月十四日の條 ○國博士 國は國家の義で、唐の國子博士に當る。令制による諸國に置かれた國博士(一九四)とは異なる。

(二三八) 日本書紀 卷第廿七

以小錦上授鬼室集斯、

(註) 天智天皇紀、十年一月の條

(二三九) 懷風藻

逮乎聖德太子、設爵分官、肇制禮義、然而專崇釋教、未遑篇章、及至淡海先帝○天、皇之受命也、恢開帝業、弘闡皇猷、道格乾坤、功光宇宙、既而以爲調風化俗、莫尚於文、潤德光身、孰先於學、爰則建庠序、徵茂才、定五禮、興百度、憲章法則、規模弘遠、復古以來、未之有也。

(註) 序の一節で、この序は「于時天平勝寶三年、歲在辛卯、冬十一月也、」と結んでゐる。

(二四〇) 日本書紀 卷第廿九

大學寮諸學生、陰陽寮、外藥寮、及舍衛女略等、捧藥及珍異等物進。

(註) 天武天皇紀下、四年一月一日の條

(二四二) 日本書紀 卷第卅

賜音博士大唐續守言、薩弘恪、書博士百濟末士善信、銀人廿兩。

(註) 持統天皇紀、五年九月四日の條

(二四二) 令義解 卷第一

卿一人、掌内外文官名帳、謂任授外、更有名帳也。考課、謂考者、考校也、課者、諸司職掌所課之庶事也、言考校一年功過者、必先據所職之條不、故曰考課、其考課令所 卿一人、掌内外文官名帳、謂任授外、更有名帳也。考課、謂考者、考校也、課者、諸司職掌所課之庶事也、言考校一年功過者、必先據所職之條不、故曰考課、其考課令所 卿一人、掌内外文官名帳、謂任授外、更有名帳也。考課、謂考者、考校也、課者、諸司職掌所課之庶事也、言考校一年功過者、必先據所職之條不、故曰考課、其考課令所 卿一人、掌内外文官名帳、謂任授外、更有名帳也。考課、謂考者、考校也、課者、諸司職掌所課之庶事也、言考校一年功過者、必先據所職之條不、故曰考課、其考課令所

(註) 「職員令」第十三條「式部省」の條

(二四三) 令義解 卷第一

頭一人、掌簡試學生及釋奠、謂依學令、大學國學、每年春秋二仲之月、釋奠先聖孔宣父、是、其音博士无生者、學令 頭一人、掌簡試學生及釋奠、謂依學令、大學國學、每年春秋二仲之月、釋奠先聖孔宣父、是、其音博士无生者、學令 頭一人、掌簡試學生及釋奠、謂依學令、大學國學、每年春秋二仲之月、釋奠先聖孔宣父、是、其音博士无生者、學令 頭一人、掌簡試學生及釋奠、謂依學令、大學國學、每年春秋二仲之月、釋奠先聖孔宣父、是、其音博士无生者、學令

二人、掌教音、書博士二人、掌教書、算博士二人、掌教算術、算生卅人、掌習算術、使部廿人、直丁二人、

〔註〕「職員令」第十四條「大學寮」の條

〔二四四〕令義解 卷第三

凡博士助教皆取明經堪爲師者謂非唯學業兼取德行也、書筆亦取業術優長者謂於書曰者、案略音博士

凡大學生取五位以上謂諸王諸臣皆是、唯親王者不在此限、別有文學、故也、子孫及東西史部謂居在皇城左右、故曰東西也、前代以來、突世繼業、或爲史

官或爲博士、因以賜姓、據謂三史也、子爲之、若八位以上、子情願者聽謂八位以上者、內外並同、子者不論嫡庶也、國學生取郡司子弟爲之謂子孫弟、經之屬也、大學生式部補、國學生國司補、並取年十三以上十六以下聽令者

爲之謂聽者、明也、察也、令者、善也、凡大學國學、每年春秋二仲之月、上丁、釋奠於先聖孔宣父謂釋菜也、奠、幣也、祀其先聖、以示敬道、宣父是孔子諡也、

其饌酒明衣所須、並用官物謂東備也、

凡學生在學、各以長幼爲序、初入學、皆行束脩之禮謂束脩、脯也、脯、於其師、各布一端

凡學生非一人、故稱各、皆有酒食、其分束脩、三分入博士、二分入助教謂案職員令、博士二人、助教二人、然則博士所、有以作七分、三分入博士、其餘四分均入助教、其自餘諸博士亦皆有束脩也、

凡經、周易、尚書、周禮、儀禮、禮記、毛詩、春秋、左氏傳、各爲一經、孝經、論語、學者兼習之、

凡教授、正業、周易、鄭立王弼注謂非一人兼習三家、或鄭、或王、習其、尚書、孔安國鄭立注、

三禮、毛詩、鄭立注、左傳、服虔杜預注、孝經、孔安國鄭立注、論語、鄭立何晏注、

凡禮記、左傳、各爲大經、毛詩、周禮、儀禮、各爲中經、周易、尚書、各爲小經、通二經者、

大經、內通一經、小經、內通一經、若中經、即併通兩經、其通三經者、大經、中經、小經、

各通一經、通五經者、大經、並通、孝經、論語、須兼通、

凡學生、先讀經文、通熟、然後講義、每旬放一日、休、前一日、博士考試謂考、校也、

者、道也、其試、讀者、每千言、內、試一帖、三言謂三言者、三字也、帖者、釋見下也、言唯千言之內、帖一處之三、不過、若懈緩、不滿者、既重於、講者、每二千言、內、問大義一條、摠試三條、通二爲第一、及

全不通對量決罰、謂對酌其管產之多少、博士隨每年終、謂考期以七月為年終、此稱三年終、亦大學頭助、狀量決、故云對量決罰也。每年終、與考期何者、為定博士考課之故也。大學頭助、國司、藝業優長者、試之、試者、通計一年所受之業、問大義八條、謂為講者、生文、讀者、即無、二年終之試、其書生試法、可、式也。六以上為上、得、四以上為中、得、三以下為下、類三下、謂三年、類下也。及在學、九年、不堪貢舉者、並解退、其從國向大學者、年數通計、服闋重任者、不在計限、謂講者、終也、言服終重任者、居喪之年、不在通計之限。

凡博士助教、皆分經、教授學者、每受一經、必令終講、所講未終、不得改業、
凡博士助教、皆計當年講授多少、以為考課等級、謂定多少者、可有別式、即、合式為多、不及為少也。

凡學生、通二經以上、求出仕者、聽舉送、其應舉者、試問大義十條、謂通二經、入若、通三、四經者、准考、課令、每經可試、問大義七條也。得八以上、送太政官、若國學生、雖通二經、猶情願學者、謂在學未滿、九年者也。申、送式部、考練得第者、進補大學生、謂考補大學生後、更被舉、試不第者、即退還本貫也。

凡學生、雖講說不長、而閑於文藻、謂開者、習也、藻者、藻麗也。才堪秀才進士者、亦聽舉送、
凡算經、孫子、五曹、九章、海島、六章、綴術、三開、重差、周髀、九司、各為一經、學生分經、習業、

凡國郡司有解經義者、即令兼加教授、謂國博士外、兼、令、教授也。若訓導有成、即宜進考、謂准、依博士、考、進、其、考、也。

凡書學生、以寫書上中以上者、聽貢、謂定書品第、待式處分、其書生、唯以兼、造、巧、秀、為、宗、不、以、習、解、字、樣、為、業、與、唐、法、異、也。其字學生、辨明術理、然後為通試、九章三條、海島周髀五遭、九司孫子三開、重差各一條、試、九、全通為甲、通六為乙、若落九章者、雖通六、猶為不第、其試綴術六章者、准前、綴、術六條、六章三條、謂若以九章與綴術、及六章與海島、等六經、願受試者、亦同合聽也。試九、全通為甲、通六為乙、若落經者、六、謂、章、也、不、通、章、也。雖通六、猶為不第、其得第者、敘法、一准明法之例、

凡學生請假、謂兼、身、及、父母、患、臨、時、請、假、之、類、者、大、學、生、經、頭、國、學、生、經、所、部、國、司、各、陳、牒、量、給、所、司、量、給、也。其休假及田衣等假、不在此限、

凡學生、自非行禮之處、謂、講、堂、及、束、脩、之、類、皆不得輒使、

凡學生在學、不得作樂、謂、不、必、五、音、雜、比、也、及雜戲、唯彈琴、習射、不禁、其不率師教、謂、率、師、也、

不受正業、好及一年之內、違假滿百日者、謂、物、教、前、後、之、違、假、一、年、之、內、既、滿、百、日、者、已、不、除、休、假、之、日、其、稱、年、者、自、違、假、之、日、始、計、也、並解退、

凡學生、年廿五以下、遭喪服闋、求還入學者、聽之、謂、在、學、未、滿、九、年、者、也、

第三章 教育の施設

一〇七

凡大學國學生、毎年五月放田假、九月放授衣假、或謂九月霜始降、婦功成、可以授多衣。其路遠者、仍斟酌給往還程。

凡學生被解退者、皆條其合解之狀、申式部下、本貫其五位以上子孫者、限年廿一、申送太政官、准蔭配色、謂不論業成不、皆當申送也。

凡學生公私有禮事處、令觀儀式、謂元日、及公卿大夫喪葬之類也。

(註) 「學令第十一 謂教化之官、惣名爲學、凡第貳拾貳條」の全文。○文學 侍講、朝廷から親王家に賜はる。「家令職員令」に「掌執經講授」と見えてゐる。

二四五 續日本紀 卷第廿一

大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝、正三位中納言兼式部卿神祇伯石川朝臣年足、參議從三位出雲守文室真人智努、參議從三位紫微大弼兼兵部卿侍從下總守巨勢朝臣關麻呂、參議紫微大弼正四位下兼左大辨紀朝臣飯麻呂、參議正四位下中務卿藤原朝臣眞楯等、奉勅改易官號、○中略式部省、惣掌

文官考賜、故改爲文部省、

(註) 淳仁天皇紀、天平寶字二年八月二十五日の條

二四六 類聚三代格 卷第四

大學寮

律學博士二人 直講三人

文章博士一人 生廿人

以前、一事已上同助博士、

(註) 神龜五年七月二十一日の勅「大學寮」の條、

二四七 日本紀略 前篇十三

減大學直講博士一員、置紀傳博士、

(註) 平城天皇紀、大同三年二月四日の條

(二四八)類聚三代格
卷第四

紀傳博士一員

右右大臣○藤原内膳宣奉勅割直講員置件博士其官位同直講

(註) 大同三年二月四日の太政官符「紀傳博士」の條

(二四九)類聚三代格
卷第四

右從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守宣奉勅宜停紀傳博士一員其紀傳得業及生亦從停止

(註) 承和元年三月八日の太政官符「應加置文章博士一員事」の條

(二五〇)續日本後紀
卷第三

勅宜停紀傳博士加置文章博士一員其紀傳得業及生徒亦停之

(註) 仁明天皇紀、承和元年四月二十日の條

(二五一)藤原家傳
下

四年三月拜爲大學助先從淨御原天皇○天武天皇晏駕國家繁事百姓多役兼屬車駕移藤原京人皆忿忙代不好學由此學校凌遲生徒流散雖有其職无可奈何公入學校視其空寂以爲夫學校者賢才之所聚王化之所宗也理國理家皆賴聖教盡忠盡孝率由茲道今學者散亡儒風不扇此非所以抑揚聖道翼贊王化也即共長官良虞王陳請遂招碩學講說經史浹辰之間庠序鬱起遠近學者雲集星列諷誦之聲洋々盈耳

(二五二)續日本紀
卷第十

太政官奏稱大學生徒既經歲月習業庸淺猶難博達實是家道困窮無物資給雖有好學不堪遂志望請選性識聰惠藝業優長者十人以下五人以上專精學問以加善誘仍賜夏冬服并食料又陰陽醫術及七曜頒曆等類國家要道不得廢闕但見諸博士年齒衰老若不教授恐致絕業望仰吉田連宜大津

連首、御立連清道、難波連吉成、山口忌寸田主、私部首石村、志斐連三田次等七人、各取弟子、將令習業、其時服食料亦准大學生、其生徒陰陽醫術各三人、囉曆各二人、又諸蕃異域、風俗不同、若無譯語、難以通事、仍仰粟田朝臣馬養、播磨直乙安、陽胡史真身、秦忌寸朝元、文元貞等五人、各取弟子二人、令習漢語者、詔並許之。

(註) 聖武天皇紀、天平二年三月二十七日之條

〔二五三〕日本後紀 卷第十四

勅諸王及五位已上子孫、十歲以上、皆入大學、分業教習、依蔭出身、猶合上寮、經一選□□□大舍人、但情願逐業者聽之。

(註) 平城天皇紀、大同元年六月十日之條

〔二五四〕日本後紀 卷第十四

勅經國治家、莫善於文、立身揚名、莫尚於學、是以大同之初、令諸王及五位已上子孫十歲已上、皆入大學、分業教習、庶使拾芥磨玉之彥、霧集於環林、吞鳥雕蟲之髦、風馳乎璧沼、而朽木難琢、愚心不移、徒積多年、未成一業、自今以後、宜改前勅、任其所好、稍合物情。

(註) 嵯峨天皇紀、弘仁三年五月二十一日之條

〔二五五〕類聚三代格 卷第七

一令諸氏子孫咸讀經史事

右檢參議從三位多治比真人今麻呂奏狀稱、緬尋古典、歷覽前王、勞於求賢、逸於經國、伏望諸氏子孫咸下大學寮、令習讀經史、學業足、用量才授職者、宜五位已上子孫年廿已下者咸下大學寮、以前意見奏狀、依今月八日詔書頒下如件。

(註) 天長元年八月二十日の太政官符の一節、この文は『本朝文粹』卷第二に「公卿意見六箇條」の題下に收

められてゐる。○「令諸氏子孫云々」は「擇良吏事」・「遣巡察使事」・「順時令事」・「舉賢避邪事」・「擇國守事」と共に列舉せられた項目

〔二五六〕續日本紀 卷第廿

勅曰、安上治民、莫善於禮、移風易俗、莫善於樂、禮樂所興、惟在二寮、門徒所苦、但衣與食、亦是天文、陰陽、曆筭、醫針等學、國家所要、並置公廨之田、應用諸生供給、其大學寮卅町、雅樂寮十町、陰陽寮十町、內藥司八町、典藥寮十町、

(註) 孝謙天皇紀、天平寶字元年八月二十三日の條

〔二五七〕日本紀略 前篇十三

詔曰、古之王者、教學爲先云々、去天平寶字元年所置大學寮田廿町、生徒稍衆、不足供費、宜更加置越前國水田一百二町、通前一百廿餘町、名曰勸學田云々、

(註) 桓武天皇紀、延曆十三年十一月七日の條

〔二五八〕類聚三代格 卷第十五

以前被右大臣藤原宣稱奉勅、今聞所行職田、彼此相贖、無有定處、或以博士田給助教、或以助教田給直講、

(註) 延曆十年二月十八日の太政官符「應定博士聯田事」の條

〔二五九〕日本三代實錄 卷第四十六

勅以新錢卅三貫、相分給左右京職出舉、以其子錢、送大學寮充學生菜料、先是、大學頭從五位上兼守右少辨藤原朝臣佐世奏言、據式、左右京職出舉、以其息利、充學生菜料、弘仁之前、每年有送、天長以降、絕而不納、其隆平永寶者、延曆十五年新貨也、厥後錢文改易、忽經五度、兩職須每改舊貫、請換新錢、而忽略其事、全失本物、遂使生徒積歎、無菜、今尋物意、給諸司公廨錢者、爲修理官舍也、然猶新泉初涌、十倍本源、況大學者、百川之學海、九流之道淵也、大廈棟梁、於是乘育、巨川舟楫、於是可採、論其弘益、豈校官舍、以彼此此、相去既遠、望請准據式文、充

給新錢、每年出舉、依例令送、若致未進、將拘職司考祿、詔從之、

(註) 光孝天皇紀、元慶八年九月十四日の條

二六〇 本朝文粹 卷第二

右得式部省解稱大學寮解稱文章博士正五位下都宿禰腹赤牒稱天平二年三月廿七日格稱文章生廿人簡取雜任及白丁聰慧不須限多少者而省去弘仁十一年十二月八日符稱太政官去十一月十五日符稱案唐式照文崇文兩館學生取三品已上子孫不選凡流今須文章生者取良家子弟寮試詩若賦補之選生中稍進者省更覆試號爲俊士取俊士翹楚者爲秀才生者今謂良家偏據符文似謂三位已上縱果如符文有妨學道何者大學尙才之處養賢之地也天下之俊咸來海內之英竝萃游夏之徒元非卿相之子楊馬之輩出自寒素之門高才未必貴種貴種未必高才且夫王者之用人唯才是貴朝爲廝養夕登公卿而況區區生徒何拘門資竊恐悠悠後進因此解體又就中文章生中置俊

士五人秀才二人至于後年更有勅旨雖非良家聽補之俊士者良家之子還居下列立號雖異課試斯同徒增節目無益政途又依令有秀才進士二科課試之法難易不同所以元置文章得業生二人隨才學之淺深擬二科之貢舉今專曰秀才生恐應科者稀矣望俊士永從停廢秀才生復舊號選文章生依天平格謹請處分者寮依解狀申送者省依解狀請官裁者正三位行中納言兼左近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣奉勅依請

(註) 天長四年六月十三日の格應補文章生并得善生復舊例事の全文

二六一 本朝文粹 卷第二

右臣伏以治國之道賢能爲源得賢之方學校爲本是以古者明王必設庠序以教德義習經藝而敘彝倫周禮卿大夫獻賢能之書于王王拜而受之所以尊道而貴士也伏見古記朝家之立大學也始於大寶年中至于天平之代右大臣吉備朝臣恢弘道藝親自傳授即令學生四百人習五經三史明法算術音韻縮

篆等六道其後代々下勅賜罪人伴家持越前國加賀郡沒官田一百餘町山城國久世郡公田卅餘町河內國茨田澁川兩郡田五十五町以充生徒食料號曰勸學田亦每日賜大炊寮百度飯一石五斗八別三升五十人料以補照讀之疲也又有勅令常陸國每年舉稻九萬四千束以其利稻充寮中雜用料又舉丹後國稻八百束以其利稻充學生口味料而年代漸久事皆睽違承和年中伴善男訴家持無罪返給加賀郡勸學田又有勅分山城國久世郡田卅町爲四分其三分賜典藥左右馬三寮纒留其一分充學生料又河內國兩郡治田頗遭洪水皆成大河又常陸丹後兩國出舉稻依度々交替缺本稻皆失無有利稻當今所遺者唯大炊寮飯料米六斗山城國久世郡遺田七町而已以此小儲充數百生徒雖作薄粥猶亦不周然而學生等成立之望猶深飢寒之苦自忘各勤鑽仰共住學館於是性有利鈍才異愚智或有捍格而難用者或有穎脫而出囊者通計而論之中才以上者曾無十分之三四也由是才士者已超擢舉用不才者衰老空歸亦其舊鄉凋落無所歸託者頭戴白雪之堆飢臥壁水之涘於是後進者偏見此輩

成群卽以爲大學是連遭坎壈之府窮困凍餒之鄉遂至父母相誡勿令子孫齒學館者也由是南北講堂鞠爲茂草東西曹局闕而無人於是博士等每至貢舉之時唯以歷名薦士曾不問才之高下人之勞逸請託由是間起濫吹爲之繁生潤權門之餘唾者生羽翼而入青雲蹈闕里之遺蹤者詠子衿而辭饗舍如此陵遲無由興復先王庠序遂成丘墟臣伏以萃人之道以食爲本望請常陸丹後兩國出舉本穎九萬四千八百束之利稻二萬八千四百四十束之代遍以諸國田租穀充給兼海國半分坂東國半分以充給學生等食又罪人伴善男所返給加賀郡田重亦沒官令給穀倉院充造道橋料重望依舊返給件田以爲勸學田又式云學生不住寮家者不得薦學者比年雖有此式不能施行者依學生之無食也今須嚴勅博士及寮頭等諸道學生雖有才藝不直寮家者不得貢舉如此則挑兮之徒歸我國冑皇矣之士列彼周行

(註) 三善清行「意見十二箇條」の一節「請加給大學生徒食料一事」の條 ○罪人伴家持 大伴家持の死後
その一族繼人等の藤原種繼暗殺事件により、繼人等の罪せられたのは元より、事件は家持にも關係ありとて

生前の官職を剝奪せられたのを指す。「續日本紀」卷第三十八桓武天皇延暦四年八月二十八日の條下に見ゆ。

○伴善男 大伴の繼人の孫

二六一 類聚符宣抄 第九

右雅材等、二代儒胤、一時俊才、天曆十年共給學問料、天德元年同補得業生、味道之志、門塵雖芳、楊庭之望、家風未扇、伏尋延喜新制、秀才課試之期、以滿七年爲限、延喜末歲已來、亦有相准之法、以給料之二年、當秀才之一年、藤原經臣給料勞四年秀才勞五年、被許登省、是其始也、但大江齊光給料勞三年秀才勞四年、殊蒙宣旨、早遂課試、就被准法、計其年數、兩勞之間、僅五年餘、今件雅材等、雖給料之程、一年不及、而秀才之勞二年已過、同計其程、已六年餘、望請早被下宣旨、以件雅材等、飽准齊光之例、將令遂、被課試、謹請處分、

(註) 應和二年四月二十五日「請殊蒙宣旨令遂課試文章得業生等狀」の條

二六三 本朝文粹 卷第六

右文時延喜之末、召候芸閣、天慶之初、對策及第、歷內記十二年、仕辨官九箇年、康保元年任當省、天延二年敍當階、非參議之四位中、文時已爲第一也、又當時儒者獻策之勞、莫先於文時者矣、○中仍一檢太宰大貳國章朝臣之近例、一尋高祖父清公朝臣之往跡、遂變八座無期之思、偏仰三品有例之恩、是則以公卿者、依有負數而難拜、階級者爲無定數、可易昇也、文時筋力久盡於五代之朝、年齡差踰於八旬之刻、餘喘難耐、非久可贖朝儀、殘命無程、亦豈永費公府、其暫加三品之末、纔可在一瞬之間者也、唯將欲荷紫紱生前之賜、以賁黃壤夢後之行也、若不蒙渙澤、遂填溝壑、則恐天下文士、海內學徒、不知公家用賢、捨愚之意、偏見文時之沈淪、皆相誠謂、勿以風月之情、奉君、勿以儒雅之事、報國矣、詩書禮樂之道、從此而可永荒、望請鴻恩、曲垂矜恤、殊施雨露之餘光、以賜銀青之榮耀、何啻一老翁之慶幸、

(註) 菅原文時「請殊蒙天恩、依當省並儒學勞、被敍從三位狀」の條

右得正五位下行大外記兼博士主税助播磨介中原朝臣致時等去七月廿日
奏狀稱謹檢案內令條所載學生四百人者是明經之生徒也雖云各積炙鞿之
勤同企拾芥之思然猶得業生四人之外又曾無立身之階繇是遂古以來依道
之選舉任氏之貴賤每年必二三人拜諸司二三分爰源雅行永觀二年二月任
主殿允息長國望寬和元年十一月任刑部錄之後汗渙之恩久隔沈潛之歎彌
深是故或拋本業而赴末學或忘大成以就少藝重席儒士之子孫倦箕裘而長
退累葉故人之胤嗣泣洙泗而空歸道之陵遲職此之由何況春秋釋奠明獻惟
嚴移唐家之儀整廟堂之禮明經道之最也而奠祭之場擗節之士已稀審問之
席析疑之徒猶乏將聖之道恐殆荒墮方今爲令勸勵生徒申置件問者生然而
稱共昇晉之定准未嗜鄒魯之篤學非開鴻漸之路何繫鷓退之心仍申請試條
之日依宣旨諸卿定申先了未蒙裁許之間仕進之思彌屈望殊蒙天恩被下宣
旨件問者生試三箇條隨其及第將關官班彼不經課試而給舉者已有拜除之

例況將及科而承理者尤當採擇之仁但至于試條一日之內令畢三條然則周
年多士之謠更扇明時之風漢日得人之頌又起聖代之化者右大臣藤原宣奉
勅依請宜以捌條爲限通伍已上及第者省宜承知依宣行之符到奉行

(註) 長徳元年八月十九日、太政官符式部省「應以捌條爲限通伍已上爲及第明經問者生課試事」の條

〔二六五〕源氏物語
少女

大方の人柄眞實に、あだめきたる所なくおはすれば、いと能く念じて、いか
で然るべき書ども疾く讀み果てて、交らひもし、世にも出で立たむと思ひ
て、唯四五月の中に、史記などいふ書は、讀み果て給ひてけり、今は寮試受け
させむとて、先づ我が御前にて試みさせ給ふ、例の大將、左大辨、式部の大
輔、左中辨などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き卷々、寮試受
けむに、博士の反さふべき節々を引き出でて、一わたり讀ませ奉り給ふに、
至らぬ限なく、かたぐに通はし讀み給へる様、爪印残らず、淺ましきまで

有り難ければ、然るべきにこそおはしけれと、誰もく涙落し給ふ、

〔二六六〕 御堂關白記

參入大内、召式部大甫、○菅原落第文十三枚、加三枚下給、不通者等文也、伴方規十上者、巨勢文任能作、藤原高延文、殊無瑕瑾、

(註) 寛弘四年二月十四日の條 ○落第、不通 これによると、十三人の落第と更に三人の落第、計十六人の落第の様であるが、『日本紀略』には十四日の條に「省試諸判、及第之者十三人之外、勅命三人」とあり、又、『權記』は「今日省試文等、式部大輔令奏、省判十三人、依闕補之、其殘三人、餘以勅判」とあつて、十六人は及第した人數である。この事は『權記』のこの前日の條「省試判、詩遺可獻、被仰式部大輔云々」とあつて、答案の及第を十三日に定めて、十四日に之を發表し、帝の仰せによつて、答案を獻上せしめ、その結果勅命によつて三人追加された事になる。これは道長の誤記であらう。伴方規、巨勢文任、藤原高延の三人はこの勅命による者であらう。○十上者 「令義解」に「凡學生通三經以上求出仕者、聽舉送、其應學者、試問大義十條、得八以上、送太政官」、「一四四」とある様に問題が十題出る。その試験の成績を、上、中、下とか、甲、乙、不第などと分けてゐるから、この十條の試験をうけ、上の成績で及第した意味らしい。

〔二六七〕 御堂關白記

明經、明法、算等、道博士、學生等、令論議、堂東篋子數、數圓座二枚、爲問答座、内渡殿爲博士等座、中島爲學生等、講說了後、召諸道馬場、賜饗、從中島引參上著、先召大博士廣澄、令講孝經、爲忠問了後、直講豐澄、前得業生問答間、豐澄如狂人、未如此奇事、衆人成恐、若是狂歎、若醉歎、云是本性云云、追立、事了、學生三番問答了、明法三番問答、其論議尤美也、元亮朝臣、允正等候、次算道三番問答、忠臣朝臣、敦等也、紀傳博士等候、圓座、上達來有數、不來民部卿、○藤原兼忠式部大輔、○菅原顯正非時、大和守賴親朝臣、

(註) 寛弘四年五月三十日の條 ○論議 經史に就いて相論議するのである。普通釋奠の後に行つた。「内ノ論議」と云つて帝の御前で行ふのを普通とするが、かく公卿の邸でもやつたらしい。講義をして、それに就いて問者が出て質問する。こゝでは、廣澄が前者、爲忠が後者である。斯道修練のためであらう。○堂道長の邸内の佛堂らしい ○大博士 明經博士の唐名、他の博士は令外の官である ○問答 二人出て互ひに議論する。それを一番といふ。三番問答は三組出る譯である。學生、明法、算道、夫々に三組づゝ、都合九組出て問答したのであらう。○上達來 「達」の下「部」字脱か ○非時 非時食であらう。非時食を大和守賴親調じたる意か。

おとゞ、〇正例より興ある試策なるを、え見過すまじく思ほえつるを、いと切なる歩みなり、と宣ひて、中島の釣殿に家司共渡りて整へ、上達部御子たち、衛府院司まで著き並み、博士文人列引きて著き並みぬ、さうとうしき、りんじかくの所より、お前ごとに卓つたまゐり、土器つちものはじまり、箸下りて、あるじのおとゞ、題いだし給ふ、探韻賜はりて八韻の文つくる、上達部御子たち、宮家の子作り給へり、作りはてて、お前に出でて、文奉る、式部丞講師して讀みあぐ、もろす、

(註) 御子たち 御子は親王か 〇さうとうしき 未詳

〔二六九〕古今著聞集
卷第四

仁平三年五月廿一日、院宣によりて宇治左大臣〇藤原東三條にて學問料の試をおこなはれけり、藤原敦經、菅原登宣、同在清、藤原敦綱、同光範、菅原在茂

等を中島の座にすへられにけり、式部大輔永範朝臣、文章博士茂明朝臣、式部權少輔公賢をめして、左傳禮記毛詩を分たびて、題をえらばされけり、みな紙切に書わけて、頭辨朝隆朝臣をめしてくじにとらせられけり、禮以行儀といふ事をとりけり、家司盛業をもて試衆にたまふ、作り出すにしたがひて、ぞもてまいりける、その、ち評定ありけり、後に院より通憲入道にもおほせあはせられけるとぞ、つゝるに光範登宣ぞ給はりにける、

(註) 「文學第五」の章「頼長公行學問料試事」の條

〔二七〇〕古今著聞集
卷第四

保元二年四月廿八日、藏人所にて直講の試ありけり、重憲、師直、師尙、おのこの屏風をへだて、候けり、頭辨範家朝臣、藏人左少辨雅頼、藏人勸解由次官、親範所につきたりけり、式部大輔永範朝臣、毛詩尙書左傳禮記の中に十の事をしるしいだして奉りたりけるを尋下されけり、師直は三事に通し、重

憲、師尙は二事に通じたりけり、次日親範仰をうけたまはりて、助教師光、○尙、頼業直講康季を藏人所にめして評定せられけり、師直傍輩にすぐれたるによりて、五月二日つゝになされにけり、

(註) 「文學第五」の章「藏人所直講試事」の條

(二七二) 津保物語の使

季英、けたうの大辨成蔭のおとゞの一男として、料賜はれる文屋童に侍り、○中七歳にて入學して今年は二十一年、それよりいく、眼のぬけ、臍の盡きむを期に定めて、大學の窓に光朗らかなる朝は、眼もかはさずまもる、光を閉ぢつる夕は、草叢の螢を集め、冬は雪を集へて、部屋に集へたる事、年重なりぬ、然あれど、當時の博士、あはれみ浅く、食欲ふかくして、料賜はらで、今年二十餘年になりぬるに、一つのしきあてず、兵を業として、惡を旨として、博打、狩、漁に、すゝめる者の、昨日今日入學して、黒しあかしのさとり無きが、ぞく

を奉るを、序を越して、季英多くのついでを過しつ、許多の博士の前にて紅の涙を流して申す、

(註) それよりいく 錯簡、或は誤脱あるか。不明。○期に定めて その時を以つて學を廢する期と定めての意。○ぞくを奉る 束脩の意であらう。詳しくは不明。博士に束脩を奉る者を順序を越えて職にあてるので、季英は後れてしまふ所である。

(二七二) 拾芥抄中本

大學寮 二條南朱雀大路東神泉苑西

(註) 「百官部第一、式部省」の條

(二七三) 拾芥抄中末

大學寮、一町 二條南三條坊門北壬生西坊城東

(註) 「宮城部第十九、諸司厨町」の條

〔二七四〕百鍊抄第八

亥刻火起、自樋口富小路、火焰如飛、八省、大極殿、小安殿、青龍白虎樓、應天會昌、朱雀門、大學寮、神祇官、八神殿、眞言院、民部省、式部省、南門、大膳職、勸學院等拂地燒亡、大内免其難、此外公卿家十餘家爲灰燼、皇居閑院、依近々、主上駕腰輿、行幸正親町邦綱卿第、凡東限富小路東、西限朱雀西、南限樋口、北限二條、凡百八十餘町、此中人家不知幾万家、希代火災也、近年連々有火事變異、果而如此、

〔註〕高倉天皇、治承元年四月二十八日の條 ○腰輿 手で轆を腰の邊まで擡げて行く輿。手輿とも云ふ。火事の際の如き火急の行幸故に用ゐ給ふ。

〔二七五〕玉葉卷第二十四

亥刻、上方有火、樋口富小路邊云々、曉更人告云、夜前火猶未消、京中人屋多以燒亡已及内裏、閑院云々、余騒起見之、火勢彌盛、其焰靡乾方、閑院有危歟、然而依疾厚、不能相扶、遣人令見實否、歸來云、於閑院者免了、雖然火勢熾盛、禁中大途

爲焰下、仍忽幸正親町東洞院、邦綱卿第、駕腰輿、關白騎馬出御、中宮同渡給、乘系毛、子細

追可尋記、依大衆事、駕腰輿卒爾行幸、爲物恠之由、世上謳歌、今以符合歟、燒亡所々、

大極殿已下、八省院一切不殘、略上大學寮、孔子御影奉取出之、勸學院等云々、

〔註〕安元三年四月二十八日の條

〔二七六〕方丈記

去安元三年四月廿八日かとよ、風はげしくふきて、しづかならざりし夜、いぬの時許みやこの東南より火いできて西北にいたる、はてには朱雀門、大極殿、大學れう、民部省などまでうつりて、一夜のうちに塵灰となりにき、ほもととは樋口富、小路とかや、病人をやどせるかりやよりいできたりけるとなん、ふきまよふ風にとかくうつりゆくほどに扇をひろげたるがごとく、すゑひろになりぬ、とほき家は煙にむせび、ちかきあたりはひたすら焰を

地にふきつけたり、そらには灰をふきたてたれば、火のひかりにえいじて、あまねくくれなる中に、風にたえず、ふき、られたるほのほ飛が如くして、一二町をこえつ、うつりゆく、其中の人うつし心あらむや、或は煙にむせびてたふれふし、或はほのほにまぐれてたちまちに死ぬ、或は身ひとつからうじてのがる、も資財を取出るに及ばず、七珍萬寶ながら灰燼となりなき、その費えいくばくぞ、其のたび公卿の家十六やけたり、ましてそのほかはかぞへしるにおよばず、惣てみやこのうち三分が一に及べりとぞ、男女しぬるもの數十人、馬牛のたぐひ邊際を不知、

(註) 病人をやどせるかりや、病人、死人等の穢れを忌んで、居宅を外へ移すことがある。こゝもその一例で、假屋にうつしたのである。

二七七 源平盛衰記 卷第四

四月二十八日亥の刻に、樋口富小路より焼亡あり、○中折節異の風はげしく

吹きて、乾を指して燃えひろぐる、融大臣、鹽釜や河原院より焼けそめて、名所三十餘箇所公卿の家十七箇所焼けにけり、○中勸學院、獎學院、○中一字も残らず焼けにけり、

(註) 「京中焼失の事」の條

二七八 玉葉 卷第二十五

晩頭、密々有和歌、光經朝臣語云、釋奠於官廳、被行事、不可然由、儒中令申、尙於本寮、可被行立幄、可用都堂、可懸貌像於倉屋、當時、奉安置之屋也云々大學寮、本不被立内裏内、若有由緒、歟、又布政之庭、不可安貌像之由、諸儒令申云々、余案之、此條不可然、但於布政之庭、講演禮之書、於議相應、加之、孔子者、治政正禮之聖人也、被安官正廳、即是政可及淳素之象也、禁忌之條、曾不可然事歟、但近代事、及如此之議、其上更無沙汰、無左右、被忌避事歟、抑立幄用都堂者、兩儀如何、其禮總以難被行歟、以政參上、申梅宮社條々、訴事、賜御教書、可持向光能朝臣云々、仍賜訴

訟四ヶ條、一御社修理事、一供神物不法事、一備中國庄事、一左馬寮妨社領事、

(註) 安元三年七月二十八日の條

(二七九) 百鍊抄第十二

自内裏被渡大學孔子御影爲書寫也

(註) 順德天皇、建曆二年三月五日の條

(二八〇) 百鍊抄第十三

盜人切開大學寮廟倉放取御影裏絹一年盜人之後新調絹裏等也及度々尤可仰

(註) 後堀河天皇、嘉祿二年十二月十二日の條

(二八一) 續日本紀卷第二

釋奠、釋奠之禮、於是始見矣、

(註) 文武天皇紀、大寶元年二月十四日の條

(二八二) 延喜式卷第二十

釋奠十一座、

二座、先聖文宣王、先師顏子、

座別籩十、堅鹽、乾魚、乾菜、栗黃、榛子人、麥人、炙人、鹿脯、白餅、黑餅、豆十、菹、菹、菹、菹、菹、菹、菹、菹、菹、菹、瓊三、大、肉、俎三、三牲、

從祀九座、閔子騫、冉伯牛、仲弓、冉有、季路、宰我、子貢、子游、子夏、

座別籩二、栗黃、豆二、葵、簋一、稷、簠一、黍、鉶一、大、鉶一、大、俎一、肉、

先聖酒樽疊三具、

犧樽二、明水、象樽二、明水、罍二、玄酒、爵三、在洗所、坩一、聖賢同、杓六、樽疊別、

先師樽疊三具、並同、

爵卅、十產、福酒爵二、已上爵同、胙六俎一、籩二、羹斲三、別加、盥罍一、均、洗一、爵巾篚一、幣篚二、

(註) 「大學寮」中「釋奠」の條

(二八三) 延喜式 卷第二十

預享之官、散齋三日、致齋二日、略中、其享官已齋而闕者、通攝行事、餘館官學官及諸學生、雅樂工人、皆清齋於學館、一宿、諸享官致齋之日、給朝夕酒食、各習禮於齋所、

(註) 「大學寮」中「釋奠」の條

(二八四) 類聚三代格 卷第十

右得式部省解稱、大學寮解稱、助教正六位上膳臣大丘牒稱、天平勝寶四年大丘隨使入唐、問先聖之遺風、覽膠庠之餘烈、國子監有兩門、題曰文宣王廟、時有

國子學生程賢、告大丘曰、今主上大崇儒範、追改爲王、鳳德之徵于今至矣、然准舊典、猶稱前號、誠恐乖崇德之情、失致敬之理、大丘庸闇、聞斯行諸、敢陳管見、以請明斷者、今依所牒、謹請省裁者、省案解狀、理須必然、方行其教、合旌厥德、後天奉時、蓋謂此乎、仍顯改由、謹請官裁者、官議奏聞、奉勅、依奏、

(註) 神護景雲二年七月三十日の太政官符、應改「孔宣父號」爲「文宣王事」の條

(二八五) 類聚三代格 卷第十

右得播磨國解稱、謹案大唐開元禮、國子大學州縣各有釋奠式、今此間唯有大學式、無諸國式、所謂大學式、則因循開元禮國子大學之式、具載奠祭之儀、明定進退之度、又式若上丁當國忌及祈年祭、改用中丁者、如此等事、未能施行、凡厥諸國相犯者多、或稱大學例、用風俗樂、或據州縣式、停止音樂、唯任人心、遂無一定、夫尊師之道、誠須嚴整、如在之禮、豈合參差、望請被賜件式、以爲永鑒、謹請官裁者、右大臣○藤原良相宣、奉勅、依請、有道宜、令作其式、早速給之、自餘諸國、同亦准此

者、因新撰定頒下如件、

(註) 貞觀二年十二月八日の太政官符「頒下釋奠式一卷事」の條

二八六 類聚三代格 卷第十

右得_レ太宰府解稱檢案内、此府釋奠_一 関子齋_一 三座行_一 而_一

貞觀二年十二月八日、頒下七道諸國式、只有二座之行事、都無九哲之釋菜、方今依式欲行則_一 故實隨例不改、則乖式文、望請無墮舊例、定行三座者、右大臣_{○藤原基經} 宣奉勅依請、

(註) 貞觀十八年六月十日の太政官符「_一 舊釋奠先聖先師関子齋三座事_一」の條 ○「舊釋奠」の前には恐らくは「應依」の二字を、「此府釋奠」の次は「先聖先師」の四字を、「関子齋」の次は「等」の字を、「三座行」の次は「來既久」の三字を、「而」の次は「太政官去」の四字を、「欲行則」の次は「失」の字を當てるべきか。

二八七 令義解 卷第一

頭一人、掌天文、曆數、風雲氣色、謂天文者、日月五星廿八宿也、曆數者、計日月之度數、而造曆授時也、氣色者、風雲之色、不言風雲者、舉氣有異密封奏聞事、助一人、尢一人、大屬一人、少屬一人、陰陽師六人、色、則有風雲可知也、 掌占筮相地、謂占者、極數知來曰占也、筮者、著曰筮也、相者、視也、 陰陽博士一人、掌教陰陽生等、陰陽生十人、掌習陰陽曆博士一人、掌造曆及教曆生等、曆生十人、掌習曆、天文博士一人、掌候天文氣色、有異密封及教天文生等、天文生十人、掌習候天文氣色、漏尅博士二人、掌率守辰丁、伺漏尅之節、守辰丁廿人、掌伺漏尅之節、以時擊鐘鼓、使部廿人、直丁二人、

(註) 「職員令」第九條「陰陽寮」の條

二八八 令義解 卷第一

頭一人、掌諸藥物、療疾病、謂依醫疾令、五位以上疾患者、並奏聞、遣醫師為療是也、 及藥園事、助一人、尢一人、大屬一人、少屬一人、醫師十人、掌療諸疾病及診候、醫博士一人、掌諸藥方脈經、教授醫生等、醫生四十人、掌學諸醫療、針師五人、掌療諸瘡病及補寫、謂虛者補之、實者寫之、 針博士一人、掌教針生等、針生廿人、掌學針、案摩師二人、掌療諸傷折、案摩博士一人、掌教案摩生等、案

摩生十人、掌學案摩瘡傷折、咒禁師二人、掌咒禁、咒禁博士一人、掌教咒禁生、咒禁生六人、掌學咒禁、藥園師二人、掌知藥性色目、謂寒溫爲性、形狀爲色、名稱爲目也、種採藥園諸草、及教藥園生、藥園生六人、掌學識諸藥、使部廿人、直丁二人、藥戶、乳戶、

(註)「職員令」第四十四條「典藥寮」の條

(二八九)令義解 卷第一

頭一人、掌文武雅曲正儀、謂无干戈者曰武、雜樂、謂雅曲正舞、以外雜樂也、男女樂人音聲人名帳、謂樂人音聲人、男女相雜、既非一色、故先稱、試練曲課、謂音聲曲度、各有大小、課其程度、試其成功也、事助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、歌師四人、掌教歌人歌女師二人、掌臨時取有聲音堪供奉者、教之、歌人卅人、歌女一百人、倂師四人、掌教雜儀、倂生百人、掌習雜儀、笛師二人、笛生六人、掌習雜儀、笛工八人、謂供此間樂而吹笛者、其唐國以下諸樂者、吹笛之人、各在其樂生中也、唐樂師十二人、掌教樂生、高麗百濟新羅樂師准此、樂生六十人、掌習樂、餘樂生准此、高麗樂師四人、樂生廿人、百濟樂師四人、樂生廿人、新羅樂師四人、樂生廿人、伎樂、謂吳樂、其腰鼓亦爲吳樂之器也、師一人、掌教伎樂生、

其生以樂戶爲之、腰鼓生准此、腰鼓師二人、掌教腰鼓生、使部廿人、直丁二人、樂戶、

(註)「職員令」第十七條「雅樂寮」の條

(二九〇)令義解 卷第八

醫博士、取醫人、謂十醫師也、下條、患家錄、醫人姓名、是也、即不知取、法術優長者、故下條云、經雖不第、量堪療疾者、補醫師也、內法術優長者、謂法者、所學之經也、術者、所療之驗也、爲之、按摩咒禁博士亦准此、謂此條、及次條不學針博者、士并生者、按文可知、醫生、按摩生、咒禁生、藥園生、先取藥部、及世習、謂藥部者、性稱藥師者、即峰田藥師、奈良藥師、類也、世習者、三世習醫業、相承爲名家者也、次取庶人年十三已上、十六已下、謂非唯庶人、藥部世習、亦同此法、按學令、五位已上子孫、及東西史部子、皆取生、即至廿一、依申送、其文云、取庶人、若八位以上子情願者、亦聽取、聽令者爲之、醫針生、各分經受業、醫生、習甲乙脈經、本草、兼習小品、集驗等方、謂甲乙經十二卷、脈經十二卷、集驗十二卷也、針生、習素問、黃帝針經、明堂脈決、兼習流注、偃側等圖、赤烏神針等經、謂問三卷、黃帝針經三卷、明堂三卷、脈決二卷、流注經一卷、偃側圖一卷、赤烏神針經一卷、文云、赤烏神針等經、即亦有餘經、故更稱等經、案下條、兼習之業、試各二條、是兼習之業、不可有三經、即雖有餘經、止試二條、不可惣試、醫針生、初入學者、先讀本草、脈決、明堂、讀本草者、即令識藥形藥性、讀明堂者、即

令驗圖識其孔穴讀脈決者令遞相診候謂假有針生甲乙二人令甲診乙乙令乙診甲是為相診候也使知四時浮沈

澀滑之狀謂澀者難也滑者利也夏脈浮冬脈沈冷脈澀溫脈滑之類是也次讀素問黃帝針經甲乙脈經皆使精熟謂習讀經文無所

滯礙者學令學生先讀經文通熟然後講義即其義也其兼習之業各令通利

醫生既讀諸經乃分業教習謂先讀文通熟後乃分其業也率廿謂依職員令醫生四十人即為五分廿四人學體以

十二人學體療謂創腫耳目等各有生即除此外三人學創腫謂創與瘡字相通也三人學少小謂六歲以上

以上為少也言治少小固多異成人故別云少小二人學耳目口齒各專其業

醫針生各從所習鈔古方誦之謂鈔者不取也古方者上條所言之外往古藥方律云今古藥方是也言

業誦其上手醫有療疾之處令其隨從習知合針灸之法

醫針生博士一月一試謂略按摩咒禁生者案文須知也典藥頭助一季一試官內卿輔年終惣試其

考試法式一准大學生例謂考試論云試也即字及句試并辭量決符等類皆准大學生例其有類三下者亦准學生解退也若業術灼然過於見任官

者即聽補替謂此未及業成年限而至於終試知業術過見任者退舊人以補新生也按其在學九年無

成者退從本色

學體療者限七年成學少小及創腫者各五年成學耳目口齒者四年成針生七

年成謂此皆習業及講義之年限其讀文之二年在講義之外故上條云在學九年無成者退從業成之日令典

藥療業術優長者就宮內省對丞以上精加校練謂此不必判官以上皆悉相得然後校試若有補

欲出仕者試問大義十條得八以具述行業謂方正清修為行申送太政官

醫針生初入學皆行束脩禮一准大學生其按摩咒禁生減半

教習本草素問黃帝針經甲乙博士皆案文講說謂案文猶云依文其如講五經之法

按摩生學按摩傷折方及判縛之法謂按摩者令他人牽舉搗批或摩使筋骨調暢邪氣散洩也傷折者折

導引令其氣復是為縛也咒禁生學咒禁解忤持禁之法謂持禁者持杖刀讀咒文作法禁氣為猛獸虎狼毒虫精魅

曰持禁也解忤者以咒禁法解業邪驚故曰解忤也皆限三年成其業成之日並申送太政官謂考試法式并等第

醫針生按摩咒禁生專令習業不得雜使謂句假及田假假等並准大學生

女醫取官戶婢年十五以上廿五以下性識慧了者卅人別所安置謂內藥司側造教

以安胎產難及創腫傷折針灸之法皆案文口授謂女醫不讀方經唯習手治故博士於其所

於此令雖不言而博士教授但按針灸等其業各異須當色博士各教授則試昇令當色試每月醫博士試年終內藥司試限七年成

凡國醫生業術優長情願入仕者本國具述藝能申送太政官

凡國醫師、教授醫方、及生徒課業年限、並准典藥寮教習法、其餘雜治、行用有効者、亦兼習之、

凡國醫生、每月醫師試、年終國司對試、並明定優劣、試有不通者、隨狀科罪、若不率師教、數有愆犯、及課業不充、終無長進者、隨事解黜、即立替人、

凡藥園、令師檢校、仍取園生、教讀本草、辨識諸藥、并採種之法、隨近山澤有藥草之處、採握種之、所須人功、並役藥戶、

(註)「醫疾令第廿四、凡貳拾漆條」の中第一條乃至第八條、第十條、第十一條、第十四條乃至第二十條

(二九二)令義解 卷第十

凡取陰陽寮諸生者、並准醫生、謂先取占氏、及世習者、後取庶人、三已上、十六已下、聽令者、爲之也、其業成年限、及束脩禮、一同大學生、謂其習業經書、及考課條數、并敘法等第、並皆依式處分也、

(註)「雜令」の第七條

(二九一)續日本紀 卷第九

始置女醫博士、

(註)元正天皇紀、養老六年十一月七日の條 ○女醫博士 醫疾令(一九〇)參照

(二九三)續日本後紀 卷第八

以東鴻臚院地二町、充典藥寮、爲御藥園、

(註)仁明天皇紀、承和六年八月十二日の條

(二九四)令義解 卷第一

凡國、博士醫師、國別各一人、其學生、大國五十人、上國四十人、中國卅人、下國廿人、醫生各減五分之四、

(註)「職員令」第八十條

〔二九五〕令義解 卷第四

凡國博士醫師者並於部內取用、謂國司簡擇才術之可用者、申太政官、即式部判補也。若無者、得於傍國通取、考限敍法、及准折、並同郡司、謂以十考爲限、十考中、進一階之類、但本非職事、故以百四十日爲考也。補任之後、並無故不得輒解、謂充侍、假滿限、及犯言當之類、此外不令合也。

〔註〕「選叙令」第二十七條

〔二九六〕續日本紀 卷第三

下制曰、依令、國博士於部內及傍國取用、然溫故知新、希有其人、若傍國無人採用、則申省、然後省選擬、更請處分、

〔註〕文武天皇紀、大寶三年三月十六日の條

〔二九七〕續日本紀 卷第七

制、大學典藥生等、業未成立、妄求薦舉、如是之徒、自今以去、不得補任國博士及

醫師、

〔註〕元正天皇紀、靈龜二年五月二十二日の條

〔二九八〕續日本紀 卷第九

勅、按察使所治之國、補博士醫師、自餘國博士並停之、

〔註〕元正天皇紀、養老七年十月八日の條

〔二九九〕續日本紀 卷第十

太政官議奏、改定諸國史生博士醫師員并考選敍限、史生大國四人、上國三人、中下國二人、以六考成選、滿即與替、博士醫師以八考成選、但補博士者、惣三四國而一人、醫師每國補焉、選滿與替、同於史生、語並在格、

〔註〕聖武天皇紀、神龜五年八月九日の條 ○語 詳細の意、但しこの格は「類聚三代格」卷第五の承和十二年四月十七日の官符の中に引かれてゐるのみで、その全文は残つて置らぬ。

二〇〇 續日本紀
卷第廿

勅曰、如聞、頃年諸國博士醫師、多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今已後、不得更然、其須講經生者三經、傳生者三史、醫生者大素、甲乙、脈經、本草、針生者、素問、針經、明堂、脈決、天文生者、天官書、漢晉天文志、三色簿讚、韓楊要集、陰陽生者、周易、新撰陰陽書、黃帝金匱、五行大義、曆竿生者、漢晉律曆志、大衍曆議、九章、六章、周髀、定天論、並應任用、被任之後、所給公廩、一年之分、必應令送、本受業師、如此、則有尊師之道、終行、教資之業、永繼、國家良政、莫要於茲、宜告所司、早令施行、

(註) 孝謙天皇紀、天平寶字元年十一月九日の條

二〇一 續日本紀
卷第廿七

太政官奏曰、准令、諸國史生、博士、醫師、國无大小、一立定數、但據神龜五年八月九日格、史生之員、隨國大小、各有等差、其博士者、惣三四國一人、醫師者、每國一

人、今經術之道、成業者寡、空設職員、擢取乏人、繕寫之才、堪任者衆、人多官少、莫能通用、朝議平章、博士惣國一、依前格、醫師兼任、更建新例、職田、事力、公廩之類、並給正國、不給兼處、有料之國、名爲正任、無料之國、名爲兼任、其史生者、博士、醫師、兼任之國、國別格外加置二人、庶令經術之士、周遍宣揚、功勞之人、普蒙霑潤、奏可、

(註) 稱徳天皇紀、天平神護二年五月十一日の條

二〇二 續日本紀
卷第卅五

太政官奏曰、謹檢令條、國无大小、每國置史生三人、博士、醫師各一人、神龜五年八月九日格、諸國史生、大國四人、上國三人、中下國各二人、但博士者、惣三四國一人、醫師每國一人、又天平神護二年四月廿六日格云、博士惣國一、依前格、醫師兼任、更建新例、其史生者、博士、醫師兼任之國、々別格外加置二人、而今望者、既多、官員猶少、因茲、國无定准、任用淆亂、臣等商量、隨國大小、增減員數、大國五

人、上國四人、中國三人、下國二人、其遷代法、一依天平寶字二年十月廿五日勅、以四歲爲限、其博士醫師兼國者、學生勞於齋糧、病人困於救療、望請每國各置一人、並以六考遷替、自今以後、立爲恒式、謹錄奏聞、伏聽天裁者、奏可之、

(註) 光仁天皇紀、寶龜十年閏五月二十七日之條

二〇三 類聚三代格 卷第五

右被右大臣○藤原國入宣稱、奉勅、明法出身與他業異、通八已上乃預敍例、七條已下皆爲不弟、學者彌倦罕習其業、自今以後、宜通件條、任國博士以勸生徒、

(註) 弘仁四年三月二十六日の太政官符、應明法生試通六七條「任國博士事」の條

二〇四 日本紀略 前篇十四

畿内諸國各置博士醫師、

(註) 嵯峨天皇紀、弘仁十二年十二月四日の條

二〇五 續日本後紀 卷第七

勅天平寶字元年勅書曰、諸學生等被任諸國博士并醫師之後、所給公廩一年之分、必應令送本受業師、夫全取一年俸、物情難和、分折之事、宜有節級、須不論在國兼任、大國二百束、上國百五十束、中國百束、下國五十束、每年折留、隨國所出、交易輕物、博士料送大學寮、醫師料送典藥寮、大學博士侍醫等兼任之類、不在此限、

(註) 仁明天皇紀、承和五年六月十日之條

二〇六 續日本後紀 卷第十

式部省言、式云、諸國博士醫師解任之後、各還本司、令熟本業、若望更任者聽之、不勞覆試、其被試及第、既任遭喪者、服闋之後、復任滿歷、但不經試者、不在此限、省依式文、喪解之前、不補他人、服闋之後、令遂其歷、因茲教授醫療、一年曠職、謹案、式云、官省判補、雜色之輩、遭喪解任、若有才用者、聽奪情、望請不待服闋、特從

復任者許之、可其先得試復更任者、亦同此例、

(註) 仁明天皇紀、承和八年二月十四日の條

(二〇七) 日本三代實錄 卷第九

若狹國言、謹檢齊衡二年五月十九日格稱、當年調庸、來年不究、明年三月卅日以前、主計寮具錄未進之數、移主稅寮、准未進之數、沒國司史生已上公廩者、貞觀四年三月廿日格稱、非受業博士醫師、宜准史生責其解由者、然則史生已上既立其制、博士醫師不入沒例、況復從事同於史生、何獨保其俸料、望請博士醫師、除受業練道人之外、同沒公廩、從之、諸國亦准此、

(註) 清和天皇紀、貞觀六年十二月十四日の條

(二〇八) 日本三代實錄 卷第十八

諸國非受業博士醫師、以四年爲秩限、但出羽及大宰管内諸國、五年爲限、○中又

諸國博士醫師受業師料、割所請公廩十分一、送納本寮、

(註) 清和天皇紀、貞觀十二年十二月二十五日の條

(二〇九) 日本三代實錄 卷第四十四

勅諸國史生、不任用當土之人及无位之輩、憲章既存、遵行有日、而非受業博士醫師、依前後格、責解由、沒公廩、用四年秩限、停受業師料等之事、一同史生、至于補任、偏據令文、尙依受業之例、無嫌當部之人、名與實違、事與情戾、自今而後、宜准史生例、非受業人、不可任當國博士醫師、又職無尊卑、理須上命、何以公官、私得相讓、頃年多有讓職之輩、父子之間、下宣旨以裁許、自餘親疎、待國解而處分、貞觀十七年格、雖云父子、自非國解、不聽相讓、自爾以來、依託此格、每年相讓、本欲遏巧僞之濫、還爲申請之媒、遂使調徭役民、頓昇八位之級、外散位輩多滿諸國之中、自今以後、宜停郡司讓職焉、

(註) 陽成天皇紀、元慶七年十二月二十五日の條

(二一〇) 日本三代實錄
卷第四十七

式部省言、式云、諸國博士醫師者、奉試及第、并其道博士等、並共舉申爲受業、自餘爲非業、又云、諸國非業博士醫師、以四年爲秩限、但出羽大宰管内諸國、五年爲限、又云、諸國博士醫師受業非業兩色、每年三月一日、移送民部省、今案件文、受業非業、才用不同、六年四年、秩限各異、而補任不辨其由、籤符隨無其狀、本任之國、量狀任用、今或國有稱非業、移民部省、號受業、歷及六年、至于有所司之勸出、本國停見任、徵俸料、愁訴之日、更下宣旨、數年之後、令滿遺歷、如斯之累、誠在無文、望請、上件受業之徒、補任解文、姓名之下、舉各本業、明注其生、任符之面、隨被注載、非業之人、自如恒例、然則國司更無疑殆、公政將有定議者、勅從之、

(註) 光孝天皇紀、仁和元年三月十五日之條

(二一一) 令義解
卷第一

博士一人、掌教授經業、謂教授管國學生、其醫師不稱、稱、教者、文略也、課試學生、

(註) 「職員令」第六十九條「大宰府」の條

(二一二) 令義解
卷第三

凡在外諸司職分田、大宰帥、十町、中博士、一町六段、中醫師、中一町四段、

(註) 「田令」第三十一條

(二一三) 續日本紀
卷第十一

勅、中筑紫兵士課役並免、中其國人習得入三色、博士者以生徒多少爲三等、上等給田一町五段、中等一町、下等五段、

(註) 聖武天皇紀、天平四年八月二十二日の條

(二一四) 延喜式
卷第十八

凡日向大隅薩摩壹岐對馬等國嶋博士醫師者、太宰准大學典藥生、試才補任、

副勸籍狀言上省載季帳申官待考滿叙內位其遷替皆以六年爲限其六國學生醫生皆集府下分業教習

(註) 「式部上」の中「大宰試才」の條

(二一五) 續日本紀 卷第廿三

遣授刀舍人春日部三關中衛舍人土師宿禰關成等六人於大宰府就大貳吉備朝臣眞備令習諸葛亮八陳孫子九地及結營向背

(註) 淳仁天皇紀、天平實字四年十一月十日の條

(二一六) 江家次第 卷第五

或說曰吉備大臣入唐持弘文館之畫像來朝案置太宰府學業院

(註) 「二月釋奠」の中「上卿着廟門座」の條

(二一七) 續日本紀 卷第卅

大宰府言此府人物殷繁天下之一都會也子弟之徒學者稍衆而府庫但蓄五經未有三史正本涉獵之人其道不廣伏乞列代諸史各給一本傳習管內以興學業詔賜史記漢書後漢書三國志晉書各一部

(註) 稱徳天皇紀、神護景雲三年十月十日の條

(二一八) 續日本後紀 卷第十五

大宰府言檢案內去弘仁六年七月廿五日格云博士醫師教授之勞良有殊別遷代成選并以六考爲期今前壹岐嶋醫師外大初位下藤野勝眞吉辭狀云謹案格式內番上者以六考爲選限外番上者以八考爲選限眞吉在任之日全得六考至于叙位被賜外階准據格式恐有訛降者府加覆審非唯眞吉以往之人亦尙然也望請眞吉位記換賜內位自今以後大隅薩摩日向壹岐對馬等國嶋博士醫師同准此例者聽之

(註) 仁明天皇紀、承和十二年六月七日の條

(二一九) 續日本後紀
卷第十五

大宰府言謹案去神龜五年八月九日格云博士者惣三四國一人醫師者每國一人又寶龜十年六月七日格云去閏五月廿七日奏稱博士醫師兼國者學生勞於齋糧病人困於救療望請每國各一人並以六考遷替立爲恒式畫聞已訖者夫醫師無兼國之任者爲有救療之急也今筑後肥前肥後豐前豐後等五ヶ國去府之程二日以上七日以下雲山重疊途路艱澁吏民之中有頓病者遙着府下營受醫藥命在呼吸且不及夕往還之間既致天殞是則無醫師之所致也望請國別減史生一人置醫師一人加以元來此府有得業生四人准大隅薩摩日向壹岐對馬國嶋之例監試得業及第之輩以將充補一切不任他人然則巷無短折之愁國有戶口之益者勅宜停減史生以典藥學生及第者補之

(註) 仁明天皇紀、承和十二年七月二十一日の條

(二二〇) 朝野群載
卷第十三

右伏檢故實菅原大江兩氏建立文章院分別東西曹司爲其門徒習儒學著氏姓者濟々于今不絕因斯此兩家之傳門業不論才不才不拘年齒菅原爲紀以七代應舉其時有高岳相如賀茂保胤者雖富才不爭大江定基以五代當仁其時有田中齊名弓削以言者雖工文不競然則累代者見重起家者見輕明矣方今能公聚窓之螢漸照蠶簡過庭之鯉志在龍門若不吹嘘何期成立望請蒙鴻恩因准先例早賜學問料令繼箕裘之業不勝懇款之至

(註) 長保四年五月二十七日大江匡衡請被給穀倉院學問料令繼六代業男蔭孫無位能公狀の條

(二二二) 朝野群載
卷第十三

右爲定謹檢舊風茂才之時以省官爲問頭省官若有故障以他儒所申請也又本省之人雖有其理同曹之時已非所問即繼菅江氏之門跡久分東西曹之學徒之故也爲定榷樟之期自至揚歷之詔早降仍傳師跡於東庠可推問頭於西

廊謂其儒士在斯人望請被下宣旨以件正家爲問頭博士將遂獻册之業、

(註) 延久元年四月十八日藤原爲定請特蒙宣旨以左少辨正五位下兼行文章博士伊豫權介藤原朝臣正家、爲課試問頭博士狀の條

(二二二) 朝野群載 卷第九

右是綱謹檢案內大學頭者或尋重代之者或依修理之功拜任古今之例也弘仁以來爲件頭之者五十餘人之中全無過十年之輩是則神鑒已明禮奠有畏之故也是綱拜任之間經十七年所修造廟堂并都堂試廳盛殿北廟藏院西北二面築垣寮西北築垣等也此外北廟藏一字新以造營檢之朝典曾無比類抑文章院者始祖左京大夫清公卿遺唐歸朝之後申請公家初立東西之曹司各分菅江之門徒而去康平年中屋舍顛倒之後二季釋奠爲令住學生纔立五間假屋其後宴會之席已倚禮儀之節長忘仍件十七間內以爲要須先分七間所申請也又式部權大輔者依獻策之次第所被拜任也是綱業傳七代齡迫八旬

當時申件官之輩皆是綱獻策之下薦也望請天恩因准先例拜任件官彌誇重華之德將傳累業之蹤、

(註) 康和二年七月二十三日菅原是綱請被殊蒙天恩因准先例依儒學勞拜任大學頭闕造進文章院西曹司七間檢皮葺屋一字兼又依獻策次第拜除式部大輔闕狀の條

(二二三) 本朝文粹 卷第七

就中龍圖授義詩之題者菅家先祖贈太政大臣預判文章博士橘廣相卿聽古樂詩之題者則江家先祖音人卿預判文章博士菅原是善卿皆是東西曹司之祖宗試場評定之龜鏡也、

(註) 大江匡衡、長徳三年八月二十九日「請重蒙天裁辨定大内記紀齊名稱有病累瑕瑾所難學生大江時棟奉試詩上狀」中「蜂腰難」の條

(二二四) 日本後紀 卷第八

清麻呂○中有六男三女、長子廣世○中大學南邊以私宅置弘文院、藏內外經書數千卷、墾田四十町、永充學料、以終父志焉。

(註) 桓武天皇紀、延曆十八年二月二十一日の條

(二二五) 西宮記 卷八

弘文院 和氣氏諸生別曹、今荒廢、在勸學院北、清曆建立之云々、

(註) 「諸院」の條

(二二六) 續日本後紀 卷第五

左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守、正三位行中納言藤原朝臣吉野、從三位藤原朝臣愛發、權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房、從四位下行勘解由長官藤原朝臣雄敏等上表言、臣聞順風呼者易爲氣、因時行者易爲力、今之所祈、蓋此之謂矣、故左大臣贈正一位

藤原朝臣冬嗣、情深謙挹、義貴能施、遂乃折割食封千戶、貯收於施藥勸學兩院、藤原氏諸親絕乏之者、同氏子弟勤學之輩、量班與之、但封邑之賞、人歿則已、所以買置田業、散在諸國、創業之始、壞利所輸、不須督促、全入院廩、大臣歿後、巧避多端、合輸不輸、十而八九、此則物色非公、人情不畏、州縣僻遠、校覈不由、所致也、伏以、臣門舊績、永錫功封、悠悠眇末、靡不沾澤、夫毀家益國、臣節攸先、以此拜章、血誠奉返、於是逸恩者戢翼、赴賞者反蹤、憑力大臣、理固宜然、而墳土未乾、陵遲儻及、在於生者、不忍緘吞、伏冀乾慈殊賜、接援下、知國司、令加檢送、然則勢易於走、丸焉、事同於轉圓矣、擾公之妨細、而濟物之矜大也、緬彼幽魂、戴光寵於窀穸、凡厥眷屬、陶寶化而俯仰、詔報曰、情切仁義、事憑興復、宜依來請、助彼周急焉。

(註) 仁明天皇紀、承和三年五月二十六日の條

(二二七) 帝王編年記 卷第十三

第三章 教育の施設

左大臣冬嗣分封戸寄施藥院爲濟貧弱也爲遊學建勸學院二條北壬生西爲勸子孫也藤氏長者管領七辨内一人補別當是謂南曹南都事奉行

(註) 淳和天皇、天長二年の條、但しこの年次については疑がある。「類聚三代格」の年次に従ふべきであらう。「二二八」参照

〔二二八〕類聚三代格卷第十二

勸學院 一區トコ在左京三條一坊

右得彼院解稱件院是贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣去弘仁十二年所建立也即爲大學寮南曹但不被管寮家創業年深内外聞遠加以去承和三年十月五日田園所輸牧宰可催送之狀騰勅符頒下諸國而所在之職未有承知恐千祀之後事不分明望請下知京職以爲後驗謹請官裁者右大臣基經宣依請

(註) 貞觀十四年十二月十七日の太政官符「勸學院事」の一條

〔二二九〕拾芥抄中末

勸學院三條北壬生西一丁藤原氏學生住也依長者宣以氏辨爲別當又有六位有無官別當有學頭有年學熟食本多嗣大臣家

(註) 「宮城部第十九」の中「諸院」の條、「西宮記」卷八にも略同文があるが、位置が示されてゐない。

〔二三〇〕宇津保物語祭の使

かくて勸學院の西の曹司に身の才もとよりあるうちに身をすて、學問をしつゝはかりなく迫りて院の内にはげなくせらるゝから、雜色厨女くしやうにょいふことも聽かず座に著けば院のうち笑ひ騒ぎてはや出で去れくといふ日に一たび短籍たんせきを出して一筈ひの飯いひを食らふ院司かいたり藤英が糧たか一つのひねりぶみと笑はれ博士達にいさゝか數まへられず父母從者たからやかから一度に滅びてはかなく便りなく學生數多に序を越えらるれども藤英對策なすべき便りなくかくてあり經る年二十五容貌こともなく才かしくき學生なり

二三二 宇津保物語
祭の使

かくておとゞ、正頼源氏におはしませども、外戚藤氏におはします、うけ申しけるによりて、大學勸學院の別當し給ふ、公の試策きこしめさすとして、博士文人八十餘人、仁壽殿に參るべきを、おほやけごと俄にとまりぬ、

二三三 宇津保物語
祭の使

おとゞ、正頼大學勸學院といふものは、大臣公卿よりはじめ奉りて、封を分け、さうを入れ、俸祿をおきたる所は、大學のみちにかくそくらといふことあらむ、豪家としてある正頼だに、ことにせぬことなり、御子だちの御俸祿かず數多あり、自らも一わう賜はる、かゝれども、家に功ある者に賜ひて、餘るをこそ料物奉るには給ふ、季英が申すごとくには、公に仕うまつりぬべき者にこそあれ、堪へたる事なき人だに、身の沈むをば愁へとする事を、理なり、貧しきをおこたりにせば、正頼こそは交らはざらましか、魂におきて

は、身の憂へある時は、公私にうれへをなし、よき人も鎮まらず、事叶ふときは、ふあくの者もをさまりぬるものなり、など宣ふ、

(註) かくそくら 未詳 ○一わう 一本「一」に 未詳

二三三 石山寺縁起

いまだ若かりけれ共、儒業を歴て勸學院の學問料を公家に望申けるが、康治元年十二月卅日十五歳にて宣旨を賜にけり、父は廿五歳の時こそ學問料を給けるに、是はいま十年早速なるうへ、後には仙籍をゆづり、文章博士にて薩摩守を兼任し、十年まで重任を賜いと目出たかりけるも、併當寺の利生寶珠の功力なりと仰信し侍るとかや、しかるを事の子細有て鳥羽院此寶珠を御相承ありけるに、叙願もことごとく成就せさせ給て、皇胤はびこり、聖運もひさしくおはしましける、ひとへに寶珠の威徳なるべし、

(二三四)百鍊抄第八

勸學院上棟

(註) 高倉天皇、治承元年八月二十二日の條

(二三五)七十一番職人歌合下

月にだに勸學院のもんぜむは立ち入る道の人ぞまれなる
をしはかるこあてだになし夜引目のいる方暗き月のあたりは
左まことに文者の作とおぼえて、ことばやはらがずとも申がたし、文選
を門前によせたるも、ついでに稽古の人のまれなる述懐の心も、おもし
ろく聞ゆ、

(二三六)日本文德天皇實錄卷第一

后○禮林亦與弟右大臣氏公朝臣、議開學舍、名學寮院、勸諸子弟、誦習經書、朝夕

濟々、時人以比漢鄧皇后、

(註) 文德天皇紀、嘉祥三年五月五日の條 ○鄧皇后「後漢書」鄧皇后傳に「詔徵和帝弟濟北河間王子女
年五歲以上四十餘人、又鄧氏近親子孫三十餘人並爲開邸第、教學經書云々」とあり、後漢和帝の皇后

(二三七)日本紀略後篇四

勅以學館院爲大學寮別曹、依參議橘好古朝臣等奏狀也、

(註) 村上天皇紀、康保元年十一月五日の條

(二三八)西宮記卷八

學館院、橘氏諸生別曹、氏
人補別當已下、

(註) 「諸院」の條

(二三九)本朝文粹卷第五

右行平幸逢泰運、猥列崇班、愚心所企、欲罷不能、昔閑院贈太政大臣、志深憂道、慮切求賢、開學舍於別館、貽善誘於一門、故藤氏之生、猶多才子、雖蹠已飽、麟角不稀、學之爲用、不其然乎、但見賢思齊、已有先式、欽慕人跡、爲日久矣、繇是置一弗宅、開以學亭、宗室苗緒、志道齡德者、當得休舍、號曰獎學院、坊接大學寮、取求道之便也、門對勸學院、表擇隣之意也、又聊設田園之業、以資簞瓢之費、其郡縣頃畝、具於別紙、又位田封戶、同以分入、豈謂久遠之輪、願有涓埃之益、凡厥一院行事、唯欲准勸學院之例而已、夫懸米雖微、造舟猶闊、不有衆川之添、何成一流之大、若當時後代、有神補此院、扶持此業者、區々之志、千載不朽矣、

(註) 「奏狀上」の章「建學館」の條、題詞に「爲在納言、建立獎學院、狀作宅一區、在左京三條、高五常とある

(二四〇) 日本紀略 前篇二十

致仕中納言在原行平上表、請准獎學院、以勸學院爲學館、

(註) 宇多天皇紀、仁和四年三月十八日の條

(二四一) 日本紀略 後篇四

大納言高明卿申獎學院申准勸學院可給年官之申文、依請被下宣旨、

(註) 村上天皇紀、應和三年閏十二月十四日の條

(二四二) 日本紀略 後篇一

以獎學院爲大學寮南曹、

(註) 醍醐天皇紀、昌泰三年九月某日の條

(二四三) 西宮記 卷八

獎學院、王氏諸生別曹、在原行平申立、公卿別當、辨別當、有官無官、別當行院事、有學頭、有年學、在勸學院西、

(註) 「諸院」の條

(二四四) 江都督願文集

第三章 教育の施設

弟子某敬白、三乘五乘之宣布也、不如上乘之輪輿、半教滿教之旁羅也、何及密教之壺輿、伏以、仁和在納言、出自天孫之岳、長於帝子之星、貞節過人、雪青藍羅之梁竹、官品知世、煙紫蘿衣之秦松、昔不任重才崇道之志、以私地乞公家、引八姓於王氏、學六藝於孔門、稱獎學院、其來尙焉、王楊盧駱之英才、夜螢聚書案之上、煙霞花月之著姓、曉鷄談紗窓之前、方今白楊早摧、已無末苗之訪、重壤北芒一閉、只有宿草之掩、孤墳悲哉、惜哉、將如之何、弟子備廟廊之崇班、掌院家之政務、聊發弘願、長修善根、奉圖繪金剛界理趣會并三千佛曼陀羅各一鋪、奉書寫理趣經一卷、三千佛名經三卷、妙法蓮華經一部八卷、无量義觀普賢阿彌陀、般若心等經各一卷、但至法華、今日開紐、又孟秋之遠忌、嘔六七輩僧、行理趣三昧、季冬之殘陰、禮三千聖極、修懺悔方法、永爲年事、敢不失墜、今就般若寺、以遂素意矣、蘆荻秋風、時令人感、梧楸黃葉、年與誰共、此寺又是江氏之草創、納言之枝別也、此院本多田地、近伏纒殘兩三、以彼土貢、宛于佛事、且爲永代相傳、且爲後人不改也、以此功德、資彼幽靈、早蕩有爲世之夢、忽備无量壽之號、又列祖聖靈

之子孫後胤、賜姓爲臣之卿士大夫、寬平以降二百歲、嘉承已往幾多人、枯木寒叢、皆濕甘露之德澤、窮塵幽石、悉照滿月之恩光、餘慶之所及、廻向于二世、陽報之所應、保護千百年、嗟呼、齧斧於甘棠之風、蓋是仁者之遺愛也、懸劍於古栢之月、豈非賢士之高行哉、乃至法界衆生平等利益、敬白、

(註) 天仁三年七月大江匡房の獎學院の願文

(二四五) 綜藝種智院式并序

辭納言藤大卿○藤原三守有左九條宅、地餘貳町、屋則五間、東隣施藥慈院、西近眞言仁祠、生休歸眞之原、迫南、衣食出內之坊居、北、涌泉水鏡而表裏、流水汎溢而左右、松竹風來琴箏、梅柳雨催錦繡、春鳥呀聲、鴻雁于飛、熱渴臨也、卽除、清涼憩也、卽至、兌白虎大道、離朱雀小澤、緇素逍遙、何必山林、車馬往還、朝夕相續、貧道有意濟物、竊庶幾置三教院、一言吐響、千金卽應、永捨券契、遠期冒地、不勞給孤之數金、忽得勝軍之林泉、本願忽感、樹名曰綜藝種智院、

(註)「序」の一節

二四六 綜藝種智院式并序

若夫九流六藝濟代之舟梁、十藏五明利人之惟寶、故能三世如來兼學而成、大覺十方賢聖綜通而證遍知、未有一味作美膳、片音調妙曲者也、立身之要、強國之道、斷生死於伊陀、證涅槃於密多、棄此而誰、是以前來聖帝賢臣、建寺置院、仰之弘道、雖然、毘訶方袍、偏翫佛經、槐序茂、廉空耽外書、至若三教之策、五明之簡、壅泥不通、肆建綜藝種智院、普藏三教、招諸能者、所冀三曜炳著、照昏夜於迷衢、五乘竝鑣、驅群庶於覺苑、或難曰、然猶事漏先覺、終未見其美、何者、備僕射之二教、石納言之芸亭、如此等院、並皆有始無終、人去跡穢、答物之興廢、必由人、人之昇沈、定在道、大海資衆流、以致深、蘇迷越衆山、以成高、大廈群材之所支持、元首股肱之所扶保、然則多類者難竭、寡偶者易傾、自然之理、使然、今所願者、一人降恩、三公勩力、諸氏英貴、諸宗大德、與我同志、百世成繼、難者曰、善也、或有人難曰、

國家廣開庠序、勸勵諸藝、霹靂之下、蚊響何益、答、大唐城坊坊置閭塾、普教童稚、縣縣開鄉學、廣導青衿、是故才子滿城、藝士盈國、今是華城、但有一大學、無有閭塾、是故貧賤子弟無所問津、遠坊好事往還多疲、今建此一院、普濟瞳矇、不亦善哉、難者曰、若能果如此、盡美盡善、與兩曜爭明、將二儀競久、益國之勝計、利人之寶洲、余雖不敏、投一簣乎九仞、添涓塵乎八埏、報四恩之廣德、爲三點之良因、

(註)「式」の最初の一節

二四七 綜藝種智院式并序

語曰、里仁爲美、擇不處仁焉得智、又曰、遊於六藝、經曰、初阿闍梨兼綜衆藝、論曰、菩薩爲成菩提、先於五明處求法、是故善財童子巡百十城、尋五十師、常啼菩薩常哭一市、切求深法、然則得智在仁者之處、成覺資五明之法、求法必於衆師之中、學道當在衣食之資、四者備而後有功、是故設斯四緣、利濟群生、雖云有處有法、若無師者、無由得解、故先請師、師有二種、一道、二俗、道所以傳佛經、俗所以弘

外書眞俗不離我師雅言

(註)「招師章」の全文

(二四八) 綜藝種智院式并序

右顯密二教僧意樂兼通外書任住俗士有意樂學內經論者法師心住四量四攝不辭勞倦莫看貴賤隨宜指授

(註)「道人傳授事」の全文

(二四九) 綜藝種智院式并序

右九經九流三立三史七略七代若文若筆等書中若音若訓或句讀或通義一部一帙堪發矇者住若道人意樂外典者茂士孝廉隨宜傳授若有青衿黃口志學文書絳帳先生心住慈悲思存忠孝不論貴賤不看貧富隨宜提撕誨人不倦三界吾子大覺師吼四海兄弟將聖美談不可不仰

(註)「俗博士教授事」の全文

(二五〇) 綜藝種智院式并序

夫人非懸瓠孔丘格言皆依食住釋尊所談然則欲弘其道必須飯其人若道若俗或師或資有心學道者並皆須給雖然道人素事清貧未辨資費且入若干物若有意益國利人志求出迷證覺者同捨涓塵相濟此願生生世世同駕佛乘共利群生

(註)「師資糧食事」の全文

(二五一) 東寶記第六

右僕射○藤原三守敏差使送書曰昔我遍照阿闍梨西土求法東歸演道眞如之風一扇羅什之跡再興弟子感化有餘大悲无棄聊捨衡汝之淺家幸爲綜藝之名院泥洹之樂已畢津梁之疲忽忘歎諸人之傳法等興復先統纘我復謀廻入塵區之

外、以爲講演之資、隨喜來意、誰有異端、還慙添輕塵於耆山之嶺、加片沙於恒河之濱、至于懸於日月而无絶期之劫石、而圓滿、願此涓熯、空忘胡顏云々、彼後以綜藝院直錢、買取少々田園、以此惣入此寺傳法料、立券契之日、右大辨和氣朝臣之名爲券主也、而田園不許入寺、私借他名、不得爲地主、依此爲成御願之事、斷後代之疑、奏聞給官符如右、

(註) 「講說等條々」の中「傳法會」の條

(二五二) 東實記第六

伏惟、綜藝院之興由甚有利益、悲群有於昏夜、濟童蒙於迷衢、弘三學以九流、助五乘以六藝、菩薩用心、諸佛慈悲、除是亦何、伏惟、故右大臣藤原朝臣閣下、○多先劫植因、今世招果、國棟梁也、舟楫也、又故遍照和尚、詢道於海西、傳法於水東、願昔誓願、遂建此院、大臣捨宅和尚稱德、師檀合契、宛如龍正、

(註) 「講說等條々」の中「傳法會」の條

(二五三) 弘法大師行狀記繪圖六

閑院の丞相○藤原冬嗣歸佛の志いよ／＼ふかく、信法の思ます／＼ねむごろなりしによりて、陶化坊の内に甲勝の地景をえらびて、大厦の構をいたし、一の齋舎を建られ、すなはち券契を投て、ながく大師にたてまつれり、彼給孤長者の沙金をしきし誠にひとしく、勝軍太子の林泉を捨しためしにおなじ、大師この精室を點じて綜藝種智院となづけ、内外受業の規式をさだめをかれ、ひろく英匠を招て三教の簡策をひらき、あまねく童稚をすくひて、五明の鑽堅をあげまさしむ、しかれば才子これよりいで、藝士こゝにしてなれり、冬嗣公の息忠仁公、○藤原良房一人師範の官に任せし日、高官嚴孝に追贈せられ、万機の政理をみがきて、大化遐邇に滂流せり、國母帝王其餘裔よりいで給へり、凡伊尹姫且補佐の任踵をつぎ、三槐九棘顯要の職肩をならぶ、これひとへに大師の法驗にこたへて、明神の感應したまふがしからしむる所なり、

〔二五四〕續日本紀
卷第卅六

大納言正三位兼式部卿石上大朝臣宅嗣薨、詔贈正二位宅嗣左大臣從一位麻呂之孫、中納言從三位弟麻呂之子也。性朗悟有姿儀、愛尚經史、多所涉覽、好屬文、工草隸、○中宅嗣辭容閑雅、有名於時、每值風景山水、時援筆而題之、自寶字後宅嗣及淡海、真人三船、爲文人之首、所著詩賦數十首、世多傳誦之、捨其舊宅、以爲阿闍寺、々内、一隅、特置外典之院、名曰芸亭、如有好學之徒、欲就閱者、悉聽之、仍記條式、以貽於後、其略曰、内外兩門本爲一體、漸極似異、善誘不殊、僕捨家爲寺、歸心久矣、爲助内典、加置外書地、是伽藍、事須禁戒、庶以同志入者、無滯空有、兼忘物我、異代來者、超出塵勞、歸於覺地矣、其院今見存焉。

〔註〕 桓武天皇紀、天應元年六月二十四日の條

〔二五五〕類聚三代格
卷第二

佛教流傳必在僧尼、度人才行實簡所司、比來出家不審學業、多由囑請甚乖法

意、自今以後、不論道俗、所舉度人、唯取身才、開誦法華經一部、或最勝王經一部、兼解禮佛淨行三年以上者、令得度者、學問彌長、囑請自休、其取僧尼兒、詐作男女、令得出家者、准法科罪、所司知而不正者、與同罪、得度者還俗、朝議商量具如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

〔註〕 天平六年十一月二十日の太政官奏「應令度者、開誦法華最勝兩經」事の條

〔二五六〕日本紀略
前篇十三

制、自今以後、年分度者、非習漢音、勿令得度、

〔註〕 桓武天皇紀、延曆十二年四月二十八日の條

〔二五七〕類聚國史
卷第百八十七

勅、雙林西變、三乘東流、明譬炬燈、慈同舟楫、是以弘道持戒、事資眞僧、濟世化人、貴在高德、而年分度者、例取幼童、頗習二經之音、未閱三乘之趣、苟避課役、纒忝